

賀川豊彦の経済観と協同組合構想

Kagawa Toyohiko's view of economy and his conception of cooperative society

松野尾 裕

私は、此際経済学の根本的改造を叫ぶものである。

それは『人間に帰れ』と云ふ叫びである。『賀川豊彦全集』第9巻、234頁

目次

- 1 はじめに
 - 1 賀川豊彦の経済哲学
 - 2 相互扶助
- 2 「生命の成長」としての経済
 - 1 主観経済学
 - 2 唯心的経済史観
 - 3 「生活の政治化、政治の生活化」としての連帯
- 3 経済に向き合う神学
 - 1 贖罪愛
 - 2 「宇宙の目的」
 - 3 神の国運動
- 4 協同組合の構想へ
 - 1 キリスト教兄弟愛
 - 2 唯心的経済史観の帰結としての協同組合
 - 3 社会科学と神学と一むすびに代えて

1 はじめに

1 賀川豊彦の経済哲学

賀川豊彦（1888（明治21）年7月10日生まれー

1960（昭和35）年4月23日死去）は、キリスト教信仰に基づいて、大正期の労働運動や農民運動で先駆的に活動し、また社会改革のための幾つもの事業を創設・推進した人として、近代日本の社会運動史にその名を残した。特に消費生活協同組合、医療生活協同組合、信用組合など協同組合事業の分野では、それぞれの実践の場において、今日まで賀川豊彦の業績に高い評価が与えられている。彼のそうした社会的活動の出発点は、まだ神戸神学校の学生であった時、1909（明治42）年12月24日に、神戸のスラムー神戸市葺合区一に住居を定め、路傍での伝道と共に、そこに暮らす生活に困窮する人たちのための支援活動を開始したことにある。

2009年は、その賀川の救霊・救貧活動開始から100周年に当たる。賀川豊彦に関心を寄せる人たちは、これを機に、改めて賀川の業績についての再検討に取り組むことになるだろう⁽¹⁾。

賀川豊彦の生涯と仕事に関する文献は多くあり、近年にも優れた評伝が相次いで出版された。雨宮栄一の三部作『青春の賀川豊彦』『貧しい人々と賀川豊彦』『暗い谷間の賀川豊彦』（新教出版社、

(1) 賀川豊彦に対する評価をめぐるのは、周知の通り、彼の没後、『賀川豊彦全集』の刊行が開始されるなかで、彼の抱いた「貧民」観ー特に賀川の代表的な著書のひとつである『貧民心理の研究』（1915年）のなかの被差別地域住民に関する記述ーが差別意識に立つものであるとして、賀川に対する強い批判が続いた（この問題をめぐる議論の経緯については、キリスト新聞社編『資料集『賀川豊彦全集』と部落差別』（キリスト新聞社、1991年）にまとめられている）。私の思うところでは、賀川の「貧民」観のなかに差別的視点が

あることは、その記述から見て明瞭であり、そのことについて、今日の論者が、時代の限界などということも含めていい訳をしてみたところで、何の意味もないであろう。それどころか、これから賀川豊彦に学ぼうとする者に誤解を与えることになりかねない。今日賀川の著作を読む者にとって大切なことは、賀川の過ちを正しく理解することである。そのうえで、自らが人権を社会理解における真の基準としているかを問い続けることである。それが賀川の残した教えだと私は思う。なお、賀川が直面した地域社会に関する優れた歴

2003, 05, 06年)と、ロバート・シルジェン／賀川豊彦記念松沢資料館監訳『賀川豊彦 愛と社会正義を追い求めた生涯』(新教出版社, 2007年)である。前者は、教会牧師を長年にわたってつとめると共にドイツのボンヘッファーの平和思想、ナチス政権下における教会の責任の問題などを研究してきた著者が、賀川豊彦ゆかりの東駒形教会の牧師をしたことを機に賀川研究を始め、その成果がこの浩瀚な三部作として結実したものである。日本プロテスタント・キリスト教思想史における賀川の位置に注意が払われている。また後者は、アメリカ・カリフォルニア州パークレーの生活協同組合の機関誌の編集者をしていた著者によるもので、英文紙誌に載った賀川の行動や発言の記録を積極的に利用しているところに特徴がある。従来の評伝は、村島帰之、横山春一、黒田四郎、武藤富男ら、賀川と行動を共にしたいわば側近たちによって書かれたものであり、そうした立場にいた人にしか知り得ないエピソードを含むなど、興味を引く記述も多くあるが、しかし他方では、賀川に対する讃美ゆえに踏み込まれていない問題もあるのではないかという疑問が当然に湧く結果となっていた⁽²⁾。そうした事情を踏まえて書かれたのが雨宮の作品であり、今後の賀川豊彦研究における基本文献となる著作である。シルジェンの作品は、何と云っても諸外国における賀川

の行動と、それがどう評価されていたのかを理解するのに有益であり、註記に記された諸紙誌を手がかりにしてさらなる研究の発展が可能であると思われる。

賀川豊彦の主な著作は、『賀川豊彦全集』全24巻(キリスト新聞社, 1962~64年)に収められている。これが今日まで賀川研究の基本的なテキストとして用いられている⁽³⁾。しかし全集に入っていない著作もある。それら賀川自身の著作及び賀川に関わる記事・文献を網羅した書誌として、米沢和一郎編『賀川豊彦』『賀川豊彦Ⅱ』(日外アソシエーツ, 1992, 2006年)がある。さらに賀川豊彦記念・松沢資料館所蔵の賀川の手稿等の目録として同館編『中間目録Ⅰ』(同館, 2006年)がある。また、賀川豊彦研究の専門誌として『賀川豊彦学会論叢』(賀川豊彦学会)と『賀川豊彦研究』(本所賀川記念館)が継続的に刊行されている。

さて、賀川豊彦に関する文献は多くあるとはいったものの、経済学者あるいは経済思想史家による賀川研究となるとわずかしかな。そうしたなかで賀川に深い関心を寄せたのは隅谷三喜男である。その著書『賀川豊彦』(日本基督教団出版部, 1966年, 岩波書店, 1995年新版)において、隅谷は、主に社会運動家としての賀川を論じ、そのなかで賀川の経済学関係の主著である『主観経済の原理』(1920年)に触れて、次のように評してい

史的研究として、安保則夫『近代日本の社会的差別形成史の研究—増補『ミナト神戸 コレラ・ベスト・スラム—』(明石書店, 2007年)がある。同書の賀川論を参照。

また、賀川豊彦記念・松沢資料館は、2006年10月3日から同年12月2日まで「特別展 満州基督教開拓村と賀川豊彦」を開催し、その際の展示資料の図録と記念講演会の記録とを併せた『賀川資料館ブックレット 満州基督教開拓村と賀川豊彦—改訂版—』(2007年)を発行した。開拓団に参加した人の証言を含むこの冊子には、平和を求めていたはずの者が実は軍事至上の国策に絡め取られ、そしてついには国家から見捨てられるという、過酷な事実が示されている。賀川豊彦の提唱から始まったこの満州移住の実態が初めて明らかにされた。本稿註(94)を参照。

(2) 村島帰之『賀川豊彦病中闘史』(ともしび社, 1951

年), 横山春一『賀川豊彦伝』(キリスト新聞社, 1951年), 黒田四郎『人間 賀川豊彦』(キリスト新聞社, 1970年), 武藤富男『評伝 賀川豊彦』(キリスト新聞社, 1981年)。賀川が死去した年に刊行された追悼文集として、田中芳三編『神はわが牧者—賀川豊彦の生涯と其の事業—』(イエスの友大阪支部, 1960年)。また、賀川豊彦生誕百年を記念してつくられた賀川豊彦写真集刊行会編『賀川豊彦写真集』(東京堂出版, 1988年)は、賀川の事蹟を写真資料で詳しく紹介しており、有益である。

(3) 『賀川豊彦全集』は第1版から第3版までであるが、同全集第8巻所収の「貧民心理の研究」及び「精神運動と社会運動」における差別的記述(差別文書)をめぐっての出版社の対応については、キリスト新聞社編『資料集『賀川豊彦全集』と部落差別』を参照。

る。「かれの経済学は、経験科学としての経済学の枠をとび出してしまっている。資本主義経済の病根を批判することはできたが、分析することはできなかった。そもそも、かれの「主観経済学」は経済学ではなく、一種の経済哲学だったのである」と。そして続けて隅谷は、賀川がその一種の経済哲学を「経済学への自己流の解釈から、あえて経済学として提示しようとしたところに誤りがあったのである。経済哲学として、それなりに展開すれば、その意味はもっと大きかったのではなかろうか」⁽⁴⁾と述べている。

その通りである、と私も思う。経済学者が、経済学の理論をもって賀川の著作に当たると、それは非経済学的な、時には荒唐無稽な主張とみなされるかもしれない。経済学の眼で賀川の所説のあら探しをしても、それでは賀川が著作をものした真意を掴むことはできないだろう。そもそも賀川は経済学の訓練を受けてはおらず、経済学者ではない。『主観経済の原理』のなかで賀川は次のように述べている。

「私は、此際経済学の根本的改造を叫ぶものである。それは『人間に帰れ』と云ふ叫びである。」⁽⁵⁾

本稿の課題は、既成の経済学にとらわれず自らが抱く神学に基づいて経済社会について考え抜いた賀川豊彦の経済哲学と、そこから帰結された実践の構想を考察することである。

2 相互扶助

1909年12月以来、賀川豊彦は、スラムでの生活を続けていたが、1913（大正2）年に芝はる（1888－1982）と結婚し、14年にはアメリカ合州国のプリンストン大学およびプリンストン神学校へ留学する機会を得た。同年8月に日本を発ち、そして2年にわたる勉学により16年5月に神学士の学位

を受け、アメリカ滞在を終えて帰国したのが17年5月であった。

それでは、賀川はアメリカ留学で何を勉強したのであろうか。ロバート・シルジェンの記すところによれば、「賀川は……プリンストン神学校の科目では彼の興味を引くものは殆ど何もないことが分かった。……彼は神学の学位のために必要とされる一般課程の履修を免除された。このために彼は大学で生物学を、特に進化論について研究するのに時間をかけることが出来た」⁽⁶⁾。そしてシルジェンはこういう。

「彼〔賀川〕は胎生学、遺伝発生学、比較解剖学、古生物学の科目を取ったが、それは進化論がキリスト教と対立するものではなく、むしろ調和するものであるという彼の見解を補強するためであった。これらの研究は、キリスト教は全体の救済に向かって方向づけられているゆえに、キリスト教は進化の宗教であるという彼の初期の見解をますます確固たるものにす。賀川は日本ですでに学んでいたクロボトキンと同様に、宇宙におけるより低いものからより高度な形態への進化を、物質間の相互関係において増大していく愛の例証だとみなした。

今まで以上に、賀川は、絶え間なく続く生存競争におけるダーウィンの「適者生存」学説は進化についての片寄った解釈だと理解するようになった。種の構成員が互いに助け合う能力は、少なくとも闘争する能力と同じくらいに生存にとって重大である。彼がこの見解を人間の世界に移し変えたとき、それは社会的ダーウィニズムへの彼の答えとなり、協同組合についての彼の哲学の根拠となった。」⁽⁷⁾

クロボトキン（Pyotr Alekseevich Kropotkin, 1842－1921）の『相互扶助論（Vzaimnaya pomoshch）』

（4） 隅谷三喜男『賀川豊彦』（岩波書店、1995年、以下本稿では岩波書店版から引用する）40頁。

（5） 賀川豊彦『主観経済の原理』（1920年）『賀川豊彦全集』第9巻所収、234頁。

（6） ロバート・シルジェン／賀川豊彦記念松沢資料館監訳『賀川豊彦 愛と社会正義を追い求めた生涯』（新教出版社、2007年）、99－100頁。

（7） 同上書、100頁。

(1902年)は、ダーウィン(Charles Robert, Darwin 1809-1882)の首唱した進化論が生存競争のみに注目されて理解された時代にあつて、自然史における生存競争があることを認めながらも、生物界における相互扶助や人間社会の歴史的発展段階における相互扶助の事実を論じたものである⁽⁸⁾。賀川が協同組合を知ったのは、1905年-徳島中学卒業の年-に石川三四郎の『協同組合の話』を読んだことによってであつた、とシルジェンは記している⁽⁹⁾。「相互扶助」は賀川の思索において重要な言葉となった。賀川は、スラム-当時は「貧民窟」と呼ばれた-の人々の暮らしぶりを述べた文章において、「貧民窟にも自我はあります。同情されることを好まない、自我があります。愛と同情は違ひます」と記し、次のように述べている。

「日本を私が讃美せざるを得ないのは、このドン底にも一種の固い道徳と、愛と、相互扶助のあることです。貧民窟で最も目につくことは、貧民同士が相互に助け合つて居ることです。」⁽¹⁰⁾

こう賀川が述べたのは1920年のことである。

この頃の日本および世界の社会情勢について簡単に触れておくと、1914年に第一次世界大戦が勃発。アメリカ合州国では労働運動が高揚し、16年夏のニューヨークでの労働者(衣料縫製職工組合)の大規模なデモンストレーションを賀川は目の当たりにした。また日本では、東京帝国大学の政治学教授であつた吉野作造(1878-1933)が「民本主義」-民主主義と同義-を唱え、「大正デモクラシー」の時代を迎えていた。そして17年にはロシアで革命が起こり、同年の十月革命-十一月革命ともいう-でソヴィエト政権が樹立した。社会改革の運動がだんだんと激化していく時代であつた。

賀川豊彦は、帰国すると再び神戸に戻り、はる夫人と共に貧しい人たちの生活改善に力を尽くしたが、それと共に17年10月には友愛会神戸連合会評議員となり、関西地域の労働運動に積極的に協力するようになった。それは、いうまでもなく、アメリカ合州国滞在中に見聞した労働運動に刺激されてのことである。18年5月に友愛会葺合支部長、8月友愛会神戸連合会機関紙『新神戸』が発刊され編集顧問、翌19年3月に同紙を『労働者新聞』と改題し発行人、4月友愛会関西労働同盟会が結成され理事長に就いた。この頃から、彼の考えの力点は「救貧策から防貧策へ」と移っていった。「防貧」という言葉は、彼の著書『精神運動と社会運動』(1919年)のなかに「日本に於ける防貧策としての労働組合運動」といういい方で出てくる。そのなかで賀川は次のように述べている。

「もし今日の貧民階級を無くしてしまふと思へば、今日の慈善主義では不可能である。……私は、救済思想の徹底はどうしても、労働問題の根底に突き衝らねばならぬと思ふ。それには、社会主義、社会改良主義、国家社会主義と云つた様な各種の主義、主張もあるが、日本の今日の現状に照して、労働組合の健全なる発達をなさしめるより急務はないと考へる。」⁽¹¹⁾

上の引用文から、賀川は、救貧における「慈善主義」の限界を感じていたこと、それに代えて「労働組合の健全なる発達」を目指していたということがわかる。救貧問題と労働問題とは異なる。今日のいい方でいえば、前者は福祉の領域に、後者は経済の領域にかかわる問題である。しかし、労働者は「貧民」となっていく可能性をいつも持っている。その意味で労働者は「貧民」の供給源でもある。だから、賀川にとって労働問題は第一

(8) N.M. ピルーモヴァ/左近毅訳『クロボトキン伝』(法政大学出版局、1994年)を参照。

(9) ロバート・シルジェン『賀川豊彦 愛と社会正義を追い求めた生涯』205頁。

(10) 賀川豊彦『地殻を破つて』(1920年)『賀川豊彦全集』第21巻所収、58-59頁。

(11) 賀川豊彦『精神運動と社会運動』(1919年)『賀川豊彦全集』第8巻所収、484頁。

義的な問題ではなかったにせよ、彼は防貧という観点から労働者の問題に関心を寄せていった。

そして21年6月に神戸の川崎・三菱両造船所でおこった大規模な労働争議では、賀川はその実行委員となり、先頭に立って活躍した⁽¹²⁾。こうした活動のなかで、賀川は自らの労働者観を著作に示した。

「賃金以上に我等労働者に要求があるのだ。我等は何よりも先に人間になりたい。我等の要求はただ賃金の値上げだけではない。八時間労働制だけではない。貧乏しても、労働時間が長くてもかまわない。先づ人間でありたい。」⁽¹³⁾

「我等は、先づ、生命を欲する自由を要求する。先づ産業上の征服された状態より我等を解放してくれ、文化はひとりで湧いて来る。文化は要するに人生の附録である。我等の要求するものは生命であり、自由であり、自主である。」⁽¹⁴⁾

賀川の主張のキーワードは「生命」である。生命は、生活、人生、人格すなわち人間そのものである。生命のために、すなわち先づ人間であるために自由を要求するのだ、と彼は論じる。労働組合運動もまた、この観点に立って、一人一人の労働者の人間としての覚醒から出発しなければならない。そうした労働組合運動の在り方を賀川は「自由組合主義」と名づけている。

「飽くまで自由を叫ばしてくれ、日本の土よ、私はパンが無くても自由に生きたい！いや、自由の為にパンを要求するまでである。私はパンの為に自由を売りたいくない。」⁽¹⁵⁾

「自由組合主義は内側から湧いてくる目醒めた

る自我の確立によつて社会を改造せんとするものである。それで今睡つて居る人がある場合にそれに向つては彼を目醒ますに外部の力を加へず、彼が自発的に目醒めて力強い自発的精神をもつて運動に参加するのを待つのである。」⁽¹⁶⁾

パンの要求すなわち賃金をはじめとする労働条件の改善を要求・実現する運動が労働組合運動であるから、上の引用文に見られる賀川の主張は、通常考えられる運動の方針にはなりえないだろう。しかしながら賀川にとっては、労働組合運動を労働条件の改善の運動とのみ捉えることはできなかった。それでは資本家の論理と同じ論理（物欲と金銭欲）に乗ってしまっているのではないかというわけである。しかも、労働条件の改善の要求にしても、資本家側がそれを暴力によって押さえ込もうとすると、労働者側もまた暴力によって対抗しなければならないとする主張が労働組合内部に強まるにつれ、労働者の人間としての覚醒に基づく秩序ある行動を方針として求める賀川の意見は、あまりにも軟弱な姿勢として批判にさらされることとなった。事実、川崎・三菱両造船所の争議は惨敗に終わったのである。しかしこの大争議の後にもなお、賀川は次のように述べている。

「理想主義を離れて真の労働運動はあり得ない。此点から云ふて我等は搾取階級に向つて階級的に自覚するのは善いと思ふけれども、理想を欠いた自覚に這入つても何の役にも立たない。何でも破壊してしまへば、それで新しいものが凡て生れるのだと考へることは大きな誤謬である。我等は必ず新しき理想の下に進まねばならぬ。

暴力や、武力や、金力で築き上げた、外面的な仮想的な権威の下に出来上がった社会組織はすぐ潰れて了ふ。そんなものの上に我等は新社会を築

(12) 隅谷三喜男『賀川豊彦』45～84頁。

(13) 賀川豊彦「賃金奴隷の解放」『労働者新聞』12号(1919年6月15日)。同上書81頁より再引用。

(14) 賀川豊彦「自由と文化」『労働者新聞』23号(1920年4月15日)、賀川豊彦全集 第11巻所収、18頁。

(15) 賀川豊彦『自由組合論』(1921年)「序」、同上書所収、3頁。

(16) 賀川豊彦「労働組合の基礎工事—支配欲より奉仕欲へ—」『労働者新聞』31号(1920年12月15日)、同上書所収、11頁。

きたくは無い。理想主義を捨てた時に労働組合は社会改造の動機としての使命を喪失してしふのである。」⁽¹⁷⁾

労働組合内部での賀川に対する批判が強まっていった。労働組合運動はもはや賀川を必要としてはいなかった。賀川自身労働運動への熱意を失っていった。

賀川豊彦が経済学に関する著作を執筆し、公刊したのは、以上に述べたような状況のなかにおいてである。それはまず、『精神運動と社会運動』(1919年)という著書のなかの「主観経済学の組織」という一章において述べられた。そしてそれを大幅に拡充したものが、『主観経済の原理』という書名で1920(大正9)年に刊行された⁽¹⁸⁾。その巻頭に付けられた「序」には次のように書かれている。これは賀川豊彦の「主観経済学」宣言である。

「私は経済学を欲望と労働の学問として取扱ひます。欲望と労働は共に心理的のものであり、主観的のものであります。それで今日までの経済学が欲望から出発しながらも、いつとはなしに物貨と貨幣に捕へられて行くのと違つて、私は飽迄その主観性で経済学を貫かんとする野心を持つて居るのであります。……私はこの主観経済の体系を以て、労働者の人格を資本主義の唯物的圧制より回復したいと思つて居るものであります。私には学説と実行とが離れなければならぬ学説を立てたく無いと云ふ欲望から、人間そのものの経済は人

間そのものの外には何も無いと云ふ結論を下して居るのであります。私に取つては、倉庫論も、銀行論も、貨幣論も、財政論も要するに人間経済の附録であります。それで、私はその凡ての物貨経済学の究極する所を掴まんと努力したのがこの主観経済学であります。……

私は自身工場を経営して見ました。私の一族と友人がやつて居る資本主義的経営法即ち金儲けと云ふものを見ました。私は労働運動をして見ました。また十年間貧民窟に住んでみました。そして私の経済学が誤つて居らぬことを確信して居ります。

……私の学問は人間の解放の爲めであります。それで学問になつて居らぬと云ふ人があればその批評も受けませう。然し私は議論するだけの爲めに此書を読んで戴きたくはありません。生きんが爲めに一そうです、今日まで捨てられて居た、人間価値と、宗教価値と、芸術価値と、そうして下等だと考へられて居た経済価値の総和を以つて生きた経済学を組織する時にそれはどんなものが出て来るか、それを頭にをいて読んで戴きたいのであります。」⁽¹⁹⁾

人間価値と宗教価値と芸術価値と経済価値との総和をもって「生きた経済学」をつくろう、と賀川は呼びかけている。

(17) 賀川豊彦「新理想主義と労働組合」『労働者新聞』47号(1921年10月1日)、隅谷三喜男『賀川豊彦』119頁より再引用。

(18) 賀川豊彦『主観経済の原理』『賀川豊彦全集』第9巻所収。なお、賀川豊彦の名を今日まで不朽のものとしている彼の自伝的小説『死線を越えて』が刊行されたのも1920年である。

(19) 賀川豊彦『主観経済の原理』『賀川豊彦全集』第9巻所収、177～178頁。引用文中にある「私は自身工場を経営して見ました」とあるのは、1917年11月に神戸のスラムに授産事業として設立した歯ブラシ工場のこ

とをいっているであろう。しかしながら1年足らずで、赤字経営のため賀川はこの工場経営から手を引くこととなった。また「私の一族と友人がやつて居る資本主義的経営法」といっているのは、はる夫人の伯父村岡平吉が経営していた印刷会社のことである。村岡は横浜で「福音印刷合資会社」という会社を設立し、聖書の印刷を行い成功した。神戸にも工場がつくられたことから、横須賀にいたはる一家がその工場で働くこととなり、神戸に移住したのである。賀川豊彦とはるとの出会いもここから始まった。

2 「生命の成長」としての経済

1 主観経済学

『主観経済の原理』の序文を先に見た。そこに示されている通り、人間価値と宗教価値と芸術価値と経済価値との総和をもって「生きた経済学」をつくるということが賀川の経済哲学のねらいであった。このことを賀川は論文「主観経済学の組織」では、こう述べている。

「生命と創造に経済的基礎を据ゑねばならない。」⁽²⁰⁾

序文をもう一度見てみよう。そこで最初にいわれていることは、経済を「欲望」と「労働」とから捉えるということである。人はパンがなければ生きられない。パンを欲すること、これが出発点である。しかも、そのパンは天から降ってくるのでは決してない。なぜならば人は労働するものとして存在しているからである。したがってパンは労働によってつくられる。賀川によれば、“生きる意欲”と“労働する意志”とが経済の二大要素である。

なぜ賀川は、欲望や労働をことさらに主観的なものと強調したのであろうか。それは、「労働者の人格を資本主義の唯物的圧制より回復したいと思つて居る」からである。人格とは、賀川がいうように「人間そのもの」だといつてよい。いのちとところを持った人間のことである。人格を「物貨と貨幣」に取って代えることはできないだろう。ところがそれを許さないからである。労働者

の人格を「唯物的圧制」より回復する、というのは賀川の心底からの叫びであった。賀川は序文のなかでこうも述べている。

「人間の心が欲望と労働の心理的興奮から段々崇物的になつて遂に唯物的資本主義に捕へられ、人間の魂を機械と資本の下に軌（したが）つて居ることを見るに堪えられなくなつたのが、この主観経済原理の組織となつて現れた。」⁽²¹⁾

賀川は、自分の学問は「人間の解放」のためである、といっている。そして、議論するだけのためにこの著作を読んで欲しくはない、「生きんがために」読んで欲しいのだ、と。賀川の熱情あふれる語り口に圧倒される思いがする⁽²²⁾。この序文が書かれたのが1920年5月12日である。この1920年5月は、東京上野公園において日本で最初のメーデーの集会が行われたことをもって年表に記録されている。こうした背景から、『主観経済の原理』第1章のタイトル「主観経済学の大系」に「新労働運動の哲学」という副題がつけられていることも了解されよう。ただし、ここで労働運動の実践的な議論や戦術が述べられているわけではない。むしろ、労働者や労働運動を支えるべき経済学に対する賀川のそれこそ主観的な考えが述べられている。

賀川は、次のようにいう。

「人間が成長する如く経済学は心理的に成長する。そして経済学が、生理的必然をのみ取扱ふものであれば、一種の記載科学としてのみ存在し得

(20) 賀川豊彦『精神運動と社会運動』『賀川豊彦全集』第8巻所収、387頁。なお、1章2節で紹介した論文「日本に於ける防貧策としての労働組合運動」は『精神運動と社会運動』のうちの「社会運動編」の一編として、論文「主観経済学の組織」は同書の「精神運動編」の一編として位置づけられている。

(21) 賀川豊彦『主観経済の原理』『賀川豊彦全集』第9巻所収、178頁。

(22) 賀川豊彦の「人間の解放」の主張を「民衆の神学」あるいは「解放の神学」に位置づけられるかどうかと

いう考察は、興味深いだろう。ロバート・シルジェンは、協同組合との関わりと共に、「現代神学における解放の神学や社会的福音の研究をとおして」賀川豊彦に関心をもったとのことである。加山久夫「訳者あとがき」ロバート・シルジェン『賀川豊彦 愛と社会正義を追い求めた生涯』所収、373頁。金子啓一は「民衆の神学」研究の立場から賀川を論じている。さしあたり、金子啓一「課題としてのカガワ・トヨヒコ」『賀川豊彦研究』第51号（2007年）所収とそこに挙げられている同氏の諸論文を参照。

るが、人間生活が、生理的必然より切抜けて……宗教的に、道徳的に、芸術的に目醒めて来て、その自由意志を行使する様になると人間の経済生活は倫理生活の一部分に巻き込れて了ふから、経済学も記載科学を離れて、規範科学の境域に飛び込んで来る。」⁽²³⁾

賀川における「心理」・「主観」という言葉の使い方には、独特のところがある。上の引用文を見ると、「生理」が生物的な自然＝客観性を表す言葉として使われているのに対して、「心理」は人間固有の「自由意志」に基づく主観性を意味する言葉として使われている。生理＝客観に対し心理＝主観である。しかも心理＝主観は倫理性を帯びるものと見なされている。これで、「経済学は心理的に成長する」という表現の意味が理解できよう。経済学はその進歩と共に倫理性を帯び、「記載科学を離れて、規範科学の境域に」入る。これが人間の成長に即した経済学の成長だということになる。

「社会に於ける心理生活が発達すればする程、物質に対する不信用が加はつて、今日では、金貨でその心理生活を計量することの無意味なることは最も明白になつた。マルクスは資本主義の経済学はそれ自身の破産であると云ふて居るが、もし、物質に対する不信用が、主観生活の成長によつて

加はらなければ、彼の説明は全く失敗なのである。……資本主義的経済学が不信用になり、金貨の価値が失墜して来たのである。価値は如斯心理化し、社会化して、主観の価値が増大し、物質経済より、生命経済又は心理経済へと推移する必要が起つたのである。主観経済学は斯の如き必要上出現したものである。」⁽²⁴⁾

賀川の説く「主観経済」は、したがって、「規範経済」といい換えられてよい。ただし、規範はあくまでも主観によるものであって、しかもその主観は「生命と創造」という根本的価値に規定されているのである。

では、経済は如何にして主観化されるのか。賀川は経済の三領域すなわち生産・分配・消費について、このことを説明している。例えば土地について、土地が持つ「郷土」「祖国」「聖地」という性格を挙げ、これらは土地の「宗教的倫理的価値」であるという。したがって、土地の「領有は、心理的、また社会的であらねばならぬ。即ち土地の所有権を個人に委して心理的社会生活から来る土地の主観化を妨害することは許容することの出来ないことである」と。また資本について、「資本とは相互扶助より来る力であるとも云ひ得る」という。そして「分配の道徳化」「消費の芸術化」を説いている⁽²⁵⁾。

(23) 賀川豊彦『主観経済の原理』【賀川豊彦全集】第9巻所収、180頁。

(24) 同上書、181頁。

(25) 同上書、182～194頁。賀川の「消費の芸術化」という主張にジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)の著作からの影響を見ることは容易である。『主観経済の原理』の序文で、賀川は「ラスキンの経済論は私にはあまりに非科学的で受取れ無かつたのでありますが、ラスキンの芸術史論は私が唯心的経済史観を編むに直接の動機を与えたものであります」と述べている。同上書、177頁。賀川はまた、論文「主観経済学の組織」では、「主観経済即芸術経済」と述べ、経済の進化によって「今日の経済組織……を、より詩的に、より芸術的に鑄直したいとの欲望は自然に湧いてくるのである」といっている。賀川豊彦『精神運動と社会

運動』【賀川豊彦全集】第8巻所収、393頁。1920年代から30年代にかけて日本ではラスキンの著書の邦訳や研究が続き、ラスキンへの関心が高まった。賀川もそうした文化風潮をつくった知識人のひとりである。23年秋から米・欧歴訪に出た賀川は翌年3月にイギリスに入り、オックスフォードのラスキン・カレッジを訪れた。その時の旅行記には「彼の経済学説は、私の経済学説によく似ている。然し、私は、彼の経済学説より、より組織的に説明せねばならぬ時代に立つてゐる。そのために私は、彼の経済学に教へられたことは誠に僅少である。ただ彼の厚生の経済学説の原理に於ては、彼が、私の先生であることは云ふまでもないことである」と記されている。賀川豊彦『雲水遍路』(1926年)【賀川豊彦全集】第23巻所収、59頁。小南浩一「賀川経済論の思想史的背景—ラスキンとブルードンの中

2 唯心的経済史観

賀川は、『主観経済の原理』の前半部を費やして、カール・マルクス (Karl Marx, 1818-1883) の唯物史観を批判し、自らが拠って立つ「唯心的経済史観」を論じている。ただし賀川は、マルクスが経済学に積極的な貢献をしたことも確かだといっている。それは二つの点においてそういえるという。すなわち、第1にマルクスは、歴史の根底には経済史があると教えたこと、第2にマルクスは、経済学は発展的に説かなければならないと教えたこと、である。そして「思想をのみ切り放して考へて居た危険より、一種の生活史より見た統括された思想研究が可能になったことは否むことの出来ないマルクスの勝利である」と。そして賀川は、賀川の仕方、物質と精神との二元論を克服しようとした。「経済生活と形而上生活とは決して二つのものでは無く、一元的に相交渉するものである」。なぜならば「共に生命と云ふ「成長」の範疇を有する意志の中に閉ぢ込められて居る」からである⁽²⁶⁾。賀川は次のようにいっている。

「経済的生産の形式云々とマルクスが云ふものも、実際はそれが生命の成長と云ふ一規範の中に、或決定的方向を与へられて居ることは拒む可らざる事実である。つまり歴史はマルクスが経済的生産過程に支配せらるると云ふも、それは相対的の云ひ分て有つて、絶対的に云へば歴史は矢張り、生命意志の成長の方向を指示したものにしか過ぎない。そして生命なるものが成長して、人間の自意識とまで進化する場合には、その宇宙とその人間社会の歴史が盲目的のものでないことは云ふまでもなく、反つて超越目的とは云はなくとも、人類の心理的自意識を通じての内在目的の範

疇を持つて進行することは認めざるを得ないであらう。」⁽²⁷⁾

賀川は、歴史を「生命の成長」といういい方でもって捉えている。しかも、「生命の成長」は規範であり、人間の自意識＝意志となる。経済生活はこの意志に指導されるのである。賀川は「経済史は生命史で有つて、無生物史と異なる」。「また経済史は、生命史である許りでなく、人間の主観史である」。「主観の欲求と自由意志が加はつて、初めて経済史が成立する」、とまとめている⁽²⁸⁾。これが、賀川のいう「唯心的経済史観」である。

賀川は、主観＝唯心ということを「我」あるいは「自我」といういい方でもっていい換えてもいる。そして「「我」の反対は運命である、輪廻である、無歴史である」⁽²⁹⁾と。

「欲望と自由意志の神秘を理解せず「我」を通じての生命の飛躍を経済史観に認識し無いならば、それは尤早や歴史の形を取らずして、輪廻の形を取るであらう。……経済史が人間の歴史である為めにはそれはどうしても「我」の歴史であらねばならぬ。」⁽³⁰⁾

ここに賀川の歴史観が明瞭に示されている。賀川の説くところによれば、「物」(＝客観)の認識は「我」(＝主観)によるのだが、「我」は時間と共に成長するのであって、それにより「物」の認識もまた成長するのである。したがって、「我」によって捉えられた「客観的真理は此意味に於て、全く自由意志の産物で有り、価値で有り、世界の再構成である。否新しき創造である」と賀川はいう⁽³¹⁾。そして「自我〔＝我〕の成長は、

心に―』賀川豊彦学会論叢』第15号(2007年)を参照。小南は、賀川の所説における鍵概念である「生命」と「自由」について、前者をラスキン受容として、後者をブルードン (Pierre Joseph Proudhon, 1809-1865) 受容として論じている。ラスキンの芸術経済論については、さしあたり、池上惇『生活の芸術化 ラスキン、モリスと現代』(丸善, 1993年)を参照。

(26) 賀川豊彦『主観経済の原理』賀川豊彦全集』第9巻所収, 200-201頁。

(27) 同上書, 201頁。

(28) 同上書, 202頁。

(29) 同上書, 206頁。

(30) 同上書, 214頁。

(31) 同上書, 220頁。

実在的価値に生きつつ、絶対の自由即ち価値のみの世界に生きんことを努力して勉めて居る。即ち自由意志によつて、無より有の価値の創造生活に入らんことを要求して居る」⁽³²⁾と。つまり、「我」の成長は、「我」に属さない「絶対」を価値として認識する、というのである。

賀川は、経済学が「ただ表面に現はれた商業取引とか、生産の方法とかのみを論じて、本能の進化を基礎として出発する経済生活を論じてくれ無いから、人類の運命を論ずるに当つても、ただ財の分配や、賃銀の問題のみを論じて、本能的欲望の整理そのものにはちつとも手をつけずに捨ててあるのである」⁽³³⁾という。ここにおいて賀川が求めていることは、端的に言って、「境遇改善」ではなく「人間改造」の議論である。こうした賀川的主張はおそらく経済学者には不可解であるに違いない。なぜならば経済学は、人間の内面には立ち入らずに社会の改善を如何に図るかという問題関心に立って、その方法をつくってきたからである。少なくともそれが自由主義に立つ経済学の考え方である。賀川の率直な主張は、経済学を逸脱するものであるとしても、経済学の存在意味を考えるうえで、聴くに値するだろう。長文になるが、賀川的主張を引用する。

「普通には経済学は経済学として存在し、必ずしも心理学などと混同する必要は無いと考へられて居るのである。私は科学研究の行きかたとしてこの研究法を必ずしも否定するものではない。然し今日の経済組織を哲学的に研究すればする程その誤謬に気が付いて来たのである。経済学を創設した人々は大抵倫理学者であつた。アダム・スミスにしても、マルサスにしても、ジョン・スチュアート・ミルにしても、皆立派な倫理学者である。然し経済学は倫理学と分立する必要は大にあつた。その研究する題目は必しも同一質のものではない。然し今日の様に銀行論と倉庫論と分化し

て行つた処で人間の運命と何等関係も無い。ただ貪ることだけを研究する科学となつて何の必要があるであらうかと考へるのが私の第一の疑問である。

……勿論生産にしても、分配にしても消費にしても皆客観的に或確實性を持つて居らぬことは無い。然しそれが人間生活に直接関係ある以上、心理生活から直接出て来て居ることは拒むことは出来ないのである。今日の経済学であれば、その心理的方面は全く没却してただ客観的人間機械の要求する熱量としての経済学が成立し得るかの如く数学の一次方程式で充分解ける様に考へて居るのであるが……今日我等の文化の程度に於て一次方程式で解き得る経済学と云ふのは全く無いので……ある。」⁽³⁴⁾

アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) の経済学が道徳哲学という母体を持つということは、確かに、経済学が何を旨とする学問であるかを理解するうえで、決定的に重要である。賀川が求める経済学は「『どんなに儲けるか?』と云ふ経済学」ではなく、「『どんなにして生きるか?』と云ふ経済学」なのである。賀川はマルクスの著作やその他の哲学書を読むことを通して、賀川なりの経済学批判を試みたのである。

3 「生活の政治化、政治の生活化」としての連帯

『主観経済の原理』の第6章以降は同書の後半部で、賀川のいい方では「新国家哲学」、いわば政治論によって構成されている。

賀川がこの著書を出した1920年当時、ロシアに共産党政権が誕生し社会主義国家が樹立したことから、生活問題・社会問題の解決をめぐる議論の潮流は「兎に角資本主義を根底から転覆させて、之を共産的の時代にすればそれで問題はなくなる」といった考えに傾斜していた。しかしながら賀川は、この考えを支持しなかった。「資本国有

(32) 同上書、223頁。

(33) 同上書、233頁。

(34) 同上書、234頁。

の国家が露西亜の様に來たとしてもそれがどれだけ、人間としての労働者の幸福であるかは頗る疑問である」と賀川はいう。賀川は政治的課題を次のように提示した。

「私は資本を云々する前に……工場内の人間を人間として取扱ふことを主張し、工場を一個の自治体と見て……工場民主主義を先づ主張するものである。

即ち私は、今日の工場を唯産業機関と見ることに絶対に反対である。長時間工場に蹲(うずくま)る生産者の群の爲めに、我等は先づ工場を人間社会の単位として、ただ物貨の製造所として機械視せず、人間の創造的衝動の試験所として社会生活の単位を工場に発見せんとするのである。」⁽³⁵⁾

ここに、「工場を一個の自治体と見」という考えが示されている。それはまた「人間の創造的衝動の試験所」、「社会生活の単位」ともいい換えられている。「人間の創造的衝動」の意味は、この箇所だけでは分かりにくい、前節で見たように、「我」に基づいた「生命の成長」とかわることであるということはないだろう。賀川が「自治体」という言葉でいおうとしているのは、労働者が生産過程自体を掌握し、それを「人間の創造的衝動の試験所」とし得るような、そうした「社会生活の単位」としての自治体、すなわち「生産者組合」である。そしてさらに、この「生産者組合」を基盤にして「生産者議会」を国家に設けよ、と賀川は説いている。これが賀川のいう「自治体としての国家」である。

では現実の労働組合がこのような「人間の創造的衝動の試験所」を組織し得るまでに成長しているかといえば、到底そうはいえない。

「〔労働組合が〕ただ、賃銀値上げと、時間短縮にのみ腐心して、時間的に創造する人格主体としての創造を主眼としなければ、遂に生産者議会も再び貨幣〔＝金力によって牛耳られた〕国家に墮落せねばならぬことになるのである。で、その爲めには、労働組合は、もう少し宗教的芸術的又科学的色彩を帯び来り、中世修道院に於て、労働と、宗教と、芸術と、科学が統一せられた如く、より多く人格総合の機関とならしめる必要がある。」⁽³⁶⁾

このような「人格総合の機関」を作り出すことを賀川は「生活の政治化、政治の生活化」といつている。すなわち、「如斯して生産者が、生活そのものを政治化し、政治そのものを生活化することによつて不生産的な殺戮的軍隊主義や、殖民地略奪の帝国主義は国家より逃げ出し、今日我等が経験する工場内と工場外の二重生活より脱出し得ることになるのである。かくて初めて国家組織は、社会機能を全くし、国民経済なるものの意義が、社会人格の成長に対する予備行為で有つたと云ふことが初めて知覚せられるのである」と。

1910年代から20年代にイギリスにおいてギルド社会主義という考えが力をもったことがある。労働組合などをギルドと呼んで、それらのギルドを基礎にして産業自治をつくり、最終的には階級国家を廃絶するという主張である⁽³⁷⁾。産業自治という理念を核にした政治的運動の主張だと理解してよい。賀川はこのギルド社会主義を知っており、賀川の「工場を一個の自治体と見」とか、「自治体としての国家」という考えは、このギルド社会主義から発想を得ていると見てよいだろう。ただし賀川自身は、自分の主張がギルドの有効性を認めるものではあっても、それが「社会主義」と見なされることには反対した。賀川は、自分の考

(35) 同上書、242頁。

(36) 同上書、252頁。

(37) ギルド社会主義は、労働組合、消費組合等の多数の自発的集団(ギルド)を基礎にし、それらを社会全体に組織して国家をつくろうとする一種の社会主義思想である。その代表的な理論家として経済学者のコール

(George Douglas Howard Cole, 1889-1959) がその名を残している。主著は、*Self-Government in Industry*, 1917, *Guild Socialism Restated*, 1920. 経済学史学会編『経済思想史辞典』(丸善, 2000年) 86, 144頁を参照。

えは何々主義といういい方で縛られるものではないと断りつつ、敢えていえば「社会化主義」だといっている。すなわち「動的人格的社会化主義」だという。

「私はギルド・ソシアリズムの論者だとされて居るが、私自身としては動的人格的社会化主義の論者で有つて、社会性の進化によつて社会を向上せしめやうと考へて居るものにしか外なら無いので、この社会性は人格の爆発—その創造的権威によつて、物質以上、商品以上、貨幣以上に立たしめやうと考へて居るのであるから、普通の唯物経済史観の人々が、財産の分けかたで社会主義を類別しやうとするのと自ら異つて居る。」⁽³⁸⁾

「社会化」とは「社会性の進化」である。この社会性の進化によって、人は誰でも生産者であると共に消費者であることに気づくはずである。人の生活という視点から見れば、「一人の労働者は生産者としての権利と消費者としての権利を共に受ける」のである。したがって、賀川を目指す社会がどのようなものによって組織されるかという、それはギルドとしての「生産(者)組合」と「消費(者)組合」である。生産組合の目的は「人格を尊重し、生産をあげ、社会奉仕の目的を以て能率をあげ、その委託せられたる事業を完全に保護し、遂行するにある」。また消費組合の目的は「商人を放逐することにある。然し……ただ安価であれば善いと云ふのでは無く、生産者の権能が充分認められて居らぬギルドの製品は買は無いと云ふ、生産者を保護する目的を持つたもので無ければなら」ず、さらには「消費の芸術化を協議的に行ひ、凡ての浪費を制限する」にある、と賀川は説く。だから国家には、上記の生産組合を基盤とした「生産者議会」と並んで、消費組合を基盤とした「消費者議会」が必要である。そしてこれら両議会で決められたことを執行する機関として

政府を設ける、という構想が示されている。

賀川はさらに「社会化主義」に基づく社会改革理念を「社会連帯の新理想主義」といい換えて、その特徴を20項目にわたって挙げ、マルクス主義のそれと対比している。そのうちの最初の6つを示すと、以下の通りである。

「マルクス主義	社会化主義
中央集権	各部調整
官僚化	自由結社
分配主義	創造主義
工場経営の官僚化	工場民主
無産者専制	社会連帯
社会の機械化	社会の自由進化」 ⁽³⁹⁾

「各部調整」は、今日的いい方では、各部分権といえは分かりやすい。1920年の書物に示されたこれら「社会化主義」を特徴づける諸理念のいずれもが、21世紀の今日においてそれらの意義がとりわけ強調されているものであることに瞠目せざるを得ない。賀川が人の進化にとって「我」の自覚と成長を重視したことは既に見たとおりである。賀川がマルクス主義に納得しないのは、マルクス主義にあつては「我」の自覚と成長を見出そうとしないと見たからであった。賀川の考えるところでは、「マルキシズムでは生活が出来るならば労働時間も出来るだけ少なくし、遊ぶ時間を出来るだけ多くしやうと云ふて居る。然し之は創造の世界を予想しない唯物的快樂主義的思想」である。この唯物的快樂主義に立つ限り、人は衣食住を充たすに足る賃金を得られてもさらに「享楽賃銀」を求めるに違いない。賀川はこれを「分配主義的思想」と呼び、分配主義の思想は「貧富懸隔の思想」だともいっている。そして、

「どうしても分配主義の思想即ち貧富懸隔の思想より離れて、新しい創造主義の世界に移り行く

(38) 賀川豊彦『主観経済の原理』『賀川豊彦全集』第9巻所収、255頁。

(39) 同上書、263頁。

必要がある。即ち所有主義の世界より、創造主義の世界に移ることである。」⁽⁴⁰⁾

「彼等〔生産者〕は一個の自治体であらねばならぬ。一人間の団体が凡て自治の自由を保留するが如く。で、今日の所謂労働組合なるものは持続しても善いが、余程不熟練労働者に対して寛容であらねばならぬ。その理由は、同じ自治体に属するものは、小児であらうが、貧民であらうが、一個の市民として保護を受けねばならぬからである。」⁽⁴¹⁾

「自治体」のなかには正規労働に耐えられる健康な成人男性だけでなく、女性も子供も高齢者も障害者も外国籍の人もいる。それらの人々も「一個の市民として保護を受けねばならぬ」と賀川はいつている。これが「人間の団体」だということである。そして、人間の団体における生産物の交換は如何に行われるべきか。ここにおいて賀川は、「相互扶助」という言葉を用いて、「人類に於ける相互扶助の精神が交換の自由の根本基礎である」といつている。

「我等が、相互扶助の精神を捨て、利得を中心とした交換を行はんとする時には、交換の自由と云ふものは決して行はれるものでは無い。交換の自由は愛と平和と好意を以つて、親がその子に対する如き犠牲的精神が団体の中に発生することによつて、初めてそこに、金銭を基礎とせざる交換の自由が行はれるのである。」⁽⁴²⁾

相互扶助に基づいた交換の自由の実現にこそ消費組合の役割がある。すなわち消費組合は、生産者専制を牽制し、金銭に縛られた不自由な交換を排し、「金力的消費」=浪費を消滅させるのである。それは「人間の欲望の総てを社会的に整理し得る機能」を持つものである。

生産者は「有産者階級が所有権を主張した真似をして腐つた文化の跡を追ふことを許され無いのである。……報酬の問題にのみ心を使ふと云ふことは許す可らざる」ことである。そして、賀川はこういう。

「生産者は、生活と、自由と、労働を与へられさへすれば、それで満足す可きである。それは母の愛にも似る可き相互扶助の世界、社会連帯の世界である。」⁽⁴³⁾

生産者は消費者との「相互扶助」=「社会連帯」にこそ満足を見出すべきだ、と賀川はいうのである。そして、『主観経済の原理』の末尾を、賀川は、次のように述べて、結んでいる。

「今日までは神と宝と兼ね仕ふること能はずと教へられて、経済価値は宗教価値に比較して下等なものであると考へられて来たのである。

然し之は、主観性の成長し無い時のことであつて、今日のやうに主観性が経済価値を充分征服し得る見込が立ち、崇物主義から唯生命主義に復活し得る場合には、経済価値は却つて宗教価値の一部分として尊まれ得るやうになつたのである。即ち分裂的自己の時に於ては価値の高下が有り得るが……価値の体系と高下の問題は主観性の成長と共に変化するものであつて、主観性が灼熱的に凡ての価値を溶かし込む時に経済価値が、神と決して背馳せず寧ろ主観性の表現に使用せられるやうになるのである。之が芸術である。

かく主観経済の確立と共に、今日までの凡ての経済病理は修復を見る。それで、今日の分裂せる価値を纏め、真の自我として生きる為めには、どうしても主観経済によるより外に道は無いのである。」⁽⁴⁴⁾

(40) 同上書、265頁。

(41) 同上書、274頁。

(42) 同上書、285頁。

(43) 同上書、322頁。

(44) 同上書、338～339頁。

3 経済に向き合う神学

1 贖罪愛

賀川豊彦は、『主観経済の原理』の末尾で、経済価値と宗教価値とは決して背馳しないということを述べた。いや背馳しないどころか経済価値は宗教価値の一部として「尊まれ得る」ともいうのである。賀川が抱くキリスト教神学に経済が如何に位置づけられているのかを考察することとしよう。賀川は、論文「キリスト教兄弟愛と経済改造」(1936年)において、この問題を扱っている⁽⁴⁵⁾。賀川はこういう。

「経済価値の世界は、主観的並びに絶対的価値運動と、決して分離してゐるものではなく、寧ろ人間生活全体から見れば、全意識活動への前提であり、基礎工事であると考へる事が出来る。かく考へて来れば、意識経済を取り入れない経済学は、半身不随の経済学であり、又普通、物的経済と考へられてゐる世界をも、意識化し得ない様な宗教運動は、神経麻痺に罹りたる不具の宗教であると考へる事が出来る。」⁽⁴⁶⁾

賀川は、東洋の宗教思想においては一般的に経済生活と宗教的なものとを分離し「経済生活をきたないものとして軽蔑」する傾向があること、また西洋においても同様の主張をする者が少なくないと述べたうえで、しかし、という。

「然し、イエス・キリストはさういふ態度をとらなかつた。キリストの主の祈りを見るとそれがよく解る。彼は日常生活のパンの問題を、神の国の来る可きことと一緒に祈つて居られる。彼が、食事の度毎に祈り、最も大切な教訓を食卓に

於て述べた外に、彼は、経済の根本問題に、随所に触れて居る。」⁽⁴⁷⁾

上記の記述に続いて賀川は、イエスが与えた教訓として『新約聖書』の福音書の叙述から「経済価値の七原則(要素)」を導き出して次のように列挙し、「イエスは厚生経済の原則を樹てた」と説いている⁽⁴⁸⁾。

- (1) 生命価値の原則：経済の根本は生命価値に始まること。
- (2) 労力価値の原則：生命価値に次いで労力価値を尊ぶべきこと。
- (3) 交換価値の原則：売買は親切を基礎としなければならないこと。
- (4) 成長価値の原則：成長は自然界に発見されること。
- (5) 選択価値の原則：(神の)審判における厳粛な選択があること。
- (6) 法的価値の原則：律法の完成は愛であること。
- (7) 目的価値の原則：神への目的を持たない場合それは全く無意義であること。

経済価値のこれら7つの要素を、賀川は、「[人間の]七つの再生力」といい換えて、「その七つの再生力を保証してゐるのが、イエスの決死的贖罪愛の精神である」と捉えた。賀川の神学思想の根本はこのイエスの贖罪愛＝十字架愛への信仰にある。「誠に彼の十字架は、神に対する愛と、人に対する愛を一つの焦点の上に燃焼させたものである。世人これと呼ぶに贖罪愛の言葉を以てするが、その言葉を以てしても、彼の尊き死の全体を表現することは困難である」。こう賀川はイエスの贖罪愛への思いを述べ、さらに次のようにいう。

(45) 賀川豊彦「キリスト教兄弟愛と経済改造」(1)～(4)『雲の柱』第15巻3号(1936年3月1日)～6号(同年6月1日)、『賀川豊彦全集』第11巻所収。なお、『雲の柱』は、賀川豊彦の信仰と事業に共感を寄せた人々の結社「イエスの友会」の機関誌として1922(大正11)年1月に創刊された月刊誌である。事実上賀川の個人

雑誌となった。1940(昭和15)年10月に治安当局の弾圧により終刊した。

(46) 賀川豊彦「キリスト教兄弟愛と経済改造」『賀川豊彦全集』第11巻所収、176頁。

(47) 同上書、185～186頁。

(48) 同上書、186頁。

「彼〔イエス・キリスト〕は、神の立場より人間を見直した。そして、神が人間社会に持つ連帯意識の立場より、人間を救はんとする意識に目覚めたのであつた。この尊い宇宙全体意識には、人間の欠点を神に懺悔し、完全の愛をもつて神に接近せんとする気持も含まれてゐた。そこに、人類の個人的価値運動と社会的価値運動の完全なる一致が発見せられる。よく神学者に、イエスの贖罪的死が個人の靈魂の爲であつて、社会全体の爲ではないといふやうなことをいふが、それだけでは足りない。個人の欠乏は宇宙全体の悩みにもなるのである。それで、キリストの贖罪愛は、人类社会全体を救ふために、個人の靈魂を救はねばならぬといふことを意味して居た。」⁽⁴⁹⁾

ここに贖罪についての賀川のを読み取ることができる。イエスの死の意味は、神による人間社会全体の救済であつて、個人の靈魂の救済はそのためにこそある、と賀川は考えたのである。しかしながら賀川の見るところ、近代のキリスト教の運動は、贖罪愛を個人の内面にのみ生かし、「社会全体に生かさうとする努力、即ちキリストが神の国と云はれた社会性、又パウロが考へたキリストの体（Soma）の中に、生かさなかつたことは残念なことであつた。パウロが考へた「体」は…キリストの愛を基礎とした社会体を意味してゐるのである」。

「私は、十字架愛の原則を、ただ一種の教条として聖壇の上に残して置かないで、キリストの如く全生命、全社会に生かして行かなければならぬと思ふ。其処にキリスト教の本質が、経済運動の本質とならなければならない原理が存在してゐる

のである。」⁽⁵⁰⁾

賀川は生涯にわたりプロテスタント・キリスト教の信仰を堅持したが、「近代キリスト教の本質が神に対する絶対の信頼にのみあつて、愛の活動にはないと考へ、経済生活から宗教運動を全然分離せんとする態度に出る者があるが、誠に悲しいことである」と述べ、人間としての活動を重んずることなく「神に対する絶対の信頼」のみを信仰の態度とするプロテスタント的信仰の在り方を批判している。「神に対する絶対の信頼は誠によい。然しそれが、手足の活動を休止して居て、且つ神に救はれ得ると信ずるものであるならば、それは一種の迷信である」とまでいつている⁽⁵¹⁾。そして、

「愛の行動を人間の行動と考へるから救ひを捷し得んとする功績のやうに考へる者もあるが、愛が神の軌道に乗ることであると考へさえすれば、それは功績でも何でもなし（ヨハネ第一書4・7）。使徒ヨハネは「愛は神より出づ」というてゐるが、実に愛は人間隧道（チャンネル）を通じて現る神の行為であるのだ（間違へては困る。それは劣性的なものをいふのでは無くして、贖罪愛的のものをいふのである）。贖罪愛は全体意識、即ち神意識から出現し、神より出るものである。即ち、この種の愛は、人間意識を通して現れても、神の軌道に乗つたものである。で、信仰とは、この柔弱に見える愛の力の方が、暴力による活動より更に大きな可能性を持つことを信ずることを含んでゐる。」⁽⁵²⁾

賀川は「カトリック教会は、人間の小さき愛を積み上げて、神の愛が彼だと思ふやうな誤謬に陥

(49) 同上書、187頁。

(50) 同上書、188頁。

(51) 隅谷三喜男は、「魂の救済」と「生活の解放」とを分離する風潮が19世紀後半以来キリスト教会のなかで支配的であつたと述べている。「キリスト教を単なる精神運動に限定していこうとするこのような傾向は、マイノリティ・グループとして、社会的に受動的な日

本のキリスト教界には、とくに顕著であつた。社会悪を身に負ひ、貧苦と病苦にさいなまれてきた賀川にとつては、このような二分法は存在の余地がなかつた」。

隅谷三喜男『賀川豊彦』168頁。

(52) 賀川豊彦「キリスト教兄弟愛と経済改造」『賀川豊彦全集』第11巻所収、188頁。

り」,また「プロテスタントは、神に依る罪の許しをのみ信じて、人間の小さき愛が、神より流れ出づる大きな愛と連絡し得可きことの、神の力の可能性を信ずることを忘れて」いるという。そして、「我々は、その〔カトリックとプロテスタント双方の〕失敗に鑑みて、神がその愛によつて完全に人類を救ひ得ることを信じ、神の愛としての贖罪愛を社会に実現して、神より来る言葉を日々聴き続ける必要がある」⁽⁵³⁾と。賀川は贖罪愛への信仰を通して、一種のエキュメニカルな (ecumenical, 教派・教会を超えた) 方向に向いているといえる。

2 「宇宙の目的」

賀川豊彦の聖書解釈の特徴について、隅谷三喜男のいうところを見てみよう。「旧約の詩人は『神は光を衣とし……』と歌つてゐるが、私は神が物質を衣として纏つてゐ給ふことを感ぜずにはをれぬ」(『聖霊に就ての瞑想』(1934年)序)という賀川を評して隅谷は、「かれの思想を見る場合まず重要なことは、人間社会はもちろん、宇宙全体を神の衣装とみたことである」という。そして「この点で、賀川は聖書解釈において重大な危険を冒すこととなった」と。すなわち「創造者である神と、被造物である宇宙＝自然とが連続的にとらえられ、被造物である自然が否定的な契機なしに賛美される危険である。それはかれの自然科学への関心が、自然法則を直接神の秩序として理解するようになる危険ともつらなっている」⁽⁵⁴⁾と、隅谷は指摘している。

しかしながら、賀川は、自然そのものに神を見えるような汎神論へ向かうことなく、明確な人格神論に立った。賀川をそうさせたのは、なによりも、神が創造した宇宙に何故過酷な悲惨や絶望的な暮らしを強いられる人々が存在するのかという「宇

宙悪」の問題を自覚し、そこに宇宙の目的を解く鍵を見出そうとしたからである。このことにかんして隅谷はこう説明している。「その出生において悪を背負い、病苦と貧苦の中に人生を歩まねばならなかった賀川にとって、神の創造したこの宇宙になぜ悪は存在するのかという問題は、かれの生の根源的な呻きでもあった。……そのかれは、宇宙悪を追求していったとき、これを克服しようとする力が働いていることを、イエスの十字架において発見したのである」⁽⁵⁵⁾。賀川は「宇宙悪」の克服としてイエスの贖罪愛を見出したのである。しかも、「賀川の贖罪愛の理解には、きわ立った一つの特徴が存在する」と隅谷は指摘する。その特色とは、贖罪における罪が、罪というよりも、人間あるいは社会の不完全さと、その不完全さを克服する成長や進歩の否定として捉えられていることである。賀川は、社会の不完全さの克服は人間の成長によって実現できると考えていた。賀川が進化論を素直に受け入れられたのもこの点とかかわっている。賀川は「宇宙の完成」として進化を理解することができたのである。このことについて賀川は、『十字架に就ての瞑想』と題する文章(1931年)において、こう述べている。

「十字架は……宇宙を完成するための十字架である。十字架は自然律の真理を完成する。宇宙を完成するためには、人間を完成しなければならぬ。人間を完成するためには、愛を完成しなければならぬ。愛を完成するためには、十字架を完成しなければならぬ。」⁽⁵⁶⁾

要するに「賀川のキリスト教社会倫理には人間の原罪＝否定の契機が弱いといわなければならない」と隅谷三喜男は述べている⁽⁵⁷⁾。

(53) 同上書, 189頁。

(54) 隅谷三喜男『賀川豊彦』187～188頁。

(55) 同上書, 189頁。

(56) 賀川豊彦『十字架に就ての瞑想』(1931年)『賀川豊彦全集』第3巻所収, 135頁。賀川には「瞑想」という言葉がタイトルにつけられた4つの著書がある。『神

に就ての瞑想』(1930年)『十字架に就ての瞑想』『キリストに就ての瞑想』(1932年)『聖霊に就ての瞑想』(1934年)である。これらはいずれも説教の筆記録であるが、賀川の神学思想を理解するうえで重要な著作である。

(57) 隅谷三喜男『賀川豊彦』, 191～192頁。

賀川豊彦は、晩年になって、『宇宙の目的』（1958年）という著書を書き下ろし、公刊した⁽⁵⁸⁾。この書物は、「序」の後に、「自然選択の定向性」「生命機構の潜在目的性」そして「宇宙目的の本質」という3つの大きな章から成っている。そして、「宇宙目的の本質」の最後に「宇宙悪とその救済」と題した一節を置いて、そこで賀川はこう述べている。

「宇宙悪は、人類の局部的意識が目覚めるとともに深まる。そして人生の矛盾を感じる率が深くなる。……不完全な人間が大きな精神的野望をもてばもつほど、宇宙悪の意識は深くなる。ことに宇宙進化の中途に置かれていることを無視して、個人として初めから完全無欠でありたいと考えると、人間として生れたことが、この上なくつまらなく思われる。……自然環境の適応性と生体内部環境の適応性がたがいに適合しないところでは、苦痛の感覚が鋭くなる。その苦痛が良薬として投与せられる場合でも局所的に見るものには、苦痛は苦痛である。かくして、全体より観察し得ず、進化発展の終局までまち得ないものには人生ほどつまらぬものはないと考えるであろう。」⁽⁵⁹⁾

賀川の説くところでは、自然環境における選択の定向性と生体機構の目的性を知るならば、その結論として、「宇宙目的は選択の組み立てによるものである」ということが理解されるはずである。しかしながら人間が不完全であることから、「選択の条件に微細な故障」が生じる。これが宇宙悪である。宇宙悪は人間の不完全＝「有限」性

によって生じているのである。しかしまた人間にはその不完全性を知るという「精神」をもたらされてもいる。この「精神」が無限絶対にまで接近しようとする意欲を起したことは勇壮なものであるとせねばならない。

賀川は、ダンテが「宇宙の究極目的」を見極めることを断念したことに触れて、自分も「ダンテに同調する必要がある」という。究極目的の見極めはつかないけれども、しかし次の6つのことはいえるとして、賀川はそれらを箇条書きにして示した⁽⁶⁰⁾。

- (1) 宇宙に（出発）目的がある。
- (2) 宇宙の目的は「生命」のほうに向いている。
- (3) 「生命」の目的は「心」（意識）のほうに向いている。
- (4) 「心」は社会的組み立てのほうに向いている。
- (5) 社会的「心」は歴史的進化発展と宇宙意識の覚醒の途上にある。
- (6) それは精神の助力を待つほうに向いている。

そして、『宇宙の目的』を賀川は次のように述べて結んでいる。

「宇宙に目的ありと発見した以上、目的を付与した絶対意志に、これから後の発展を委託すべきだと思う。さればといって、なげやりにせよという意味ではない。私は、人間の意識の目ざめるままに、すべてを切り開いていく苦闘そのものに、超越的宇宙意志の加勢のあることを見いだすべきであると思う。」⁽⁶¹⁾

(58) 賀川豊彦『宇宙の目的』（1958年）『賀川豊彦全集』第13巻所収。この書物は賀川が多年にわたって蓄積した自然科学の知識を賀川流に動員してまとめられたもので、科学と宗教との強引な一体化と評されても仕方がないものかもしれない。しかし賀川自身は自らの「宇宙」観を、それを表現するのに最もふさわしいと考えた言葉でもって思う存分に述べたのであろう。

(59) 同上書、453～454頁。

(60) 同上書、453頁。

(61) 同上書、454頁。賀川豊彦の神学思想は今後さらに探究されるべきテーマであろう。賀川の神学思想のユニークさを「生命」を鍵概念にして論じたものに、鶴沼裕子「賀川豊彦試論—その信の世界を中心に—」同『近代日本キリスト者の信仰と倫理』（聖学院大学出版会、2000年）所収がある。鶴沼は、同論文の結論箇所で、本稿で引用した賀川の『宇宙の目的』の末尾の一文に触れ、「彼は超越的意志の「加勢」を信じるがゆえに、宇宙悪との戦いという果てしない苦闘に従事

3 神の国運動

さてもう一度1920年代に戻ることにする。

1921 (大正10) 年10月―神戸での川崎・三菱両造船所の太争議が惨敗し終結した2か月後に賀川豊彦は、キリスト教界の実情に不満を抱く若い教職者らと共に「イエスの友会」を結成した。このイエスの友会は従来の教会の在り方を批判するなかから生まれた、キリスト教伝道のための組織である。当時賀川は次のようなことを述べていた。

「私は今日の教会と行く道を異にして居ります。それは今日の教会は小さい罪を八釜敷云ふて、大きな資本主義の罪を脱かして了ふことです。私はこの点に於て今日の教会が行つて居る安易な道を歩きたくありません。」⁽⁶²⁾

「私は近頃益々今日までの基督教の行く可き道の間違つて居ることを思ひます。それと云ふのも愛の生活が無いからです。教会へ行つても扶け合

ひが無いので実に冷つこいものであります。扶け合ひをすると云ふことが教会と云ふのではないでせうか。」⁽⁶³⁾

イエスの友会は次の5つのことを綱領として掲げた。

- (1) イエスにありて敬虔なること。
- (2) 貧しき者の友となりて労働を愛すること。
- (3) 世界平和のために努力すること。
- (4) 純潔なる生活を貴ぶこと。
- (5) 社会奉仕を旨とすること。

そして、1925年7月に開催されたイエスの友会の修養会において、賀川は「百万人の霊を神に捧ぐ」運動を行うことを提案し決議した。当時日本のプロテスタント系教会の信徒数は約16万人であったといわれるが、それを100万人にまで増やそうというのである。キリスト教を社会改革の力とするための運動である。賀川は、同年末に開かれた日本基督教連盟の協議会の席上で、「百万人救

することができたのである。この姿勢は、歴史の進歩に夢を託す単なる楽天主義とは異なる」と評している。そして次のように述べている。「賀川の信の世界は、神の観念を初め信仰告白の核となる諸契機の受けとめ方などにおいて、少なくとも正統プロテスタント主義の通念とは合致せぬ部分が少なくない。従つて、彼のキリスト教思想そのものに、キリスト教史の中でしかるべき評価を与えることは困難であるかもしれない。しかし、単に賀川のキリスト教を、正統プロテスタント主義の教義理解を尺度として評価裁断するだけでは、そこからは後世にとって何の生産的なものも得られないであろう。「生命」の意味が多様な角度から改めて問い直されている今日、われわれは、賀川が根源的な“生命体験”をとおしてキリスト教信仰を主体の中に真に確たるものとして根づかせたことをこそ、日本キリスト教史におけるひとつの新しい創造として位置づけるべきであろうと考える」。同書、160～161頁。

雨宮栄一は、贖罪信仰をめくり、近代日本で社会問題に積極的に取り組んだキリスト者の多く―例えば安部磯雄 (1865―1949)、村井知至 (1861―1944)―がユニテリアン (三位一体の否認、すなわち贖罪信仰の欠落) であったのに対し、賀川豊彦は贖罪信仰に固く立っていたと指摘し、この点では賀川はプロテスタント正統派の植村正久 (1857―1925) や内村鑑三 (1861―1930) と変わらないという。その上で、「およそ贖罪信仰を内

実とする正統主義に立った人たちの中で、救霊を課題としながらなお社会の問題に実践的に関わり続けたのは、内村でもなく植村でもなく、賀川であったと言わねばならない。ここに賀川の信仰理解の特徴があるといつてよい。同一の贖罪信仰に立ちながら、何故、賀川は社会運動に深くコミットしたのか」と問い、日本の正統プロテスタント神学における贖罪論との比較において賀川の贖罪論＝贖罪愛の特徴を論じている。雨宮栄一『貧しい人々と賀川豊彦』(新教出版社、2005年)の「V 大正期における賀川の信仰思想」。雨宮は、「神の贖罪愛によって生かされた者は、今度はそれへの応答として自ら贖罪愛の精神に生きるべきである」というのが賀川の主張だ、と述べている。同書、231頁。

また、賀川の「宇宙」観に着目してかれの思想の特徴を、カトリック思想との比較の上で論じたものとして、岸英司「宇宙感覚の宗教性―ビエール・ティヤール・ド・シャルダンと賀川豊彦の宗教思想についての比較研究試論―」(1)(2)『ノートルダム清心女子大学紀要文化学編』第9巻第1号・第2号 (1985、86年) 所収がある。岸は、自然界の進化のなかに「宇宙意志」を見出す賀川豊彦に神秘主義的傾向を読み取っている。

(62) 賀川豊彦「身辺雑記」(1922年4月)『全集』第24巻所収、6頁。

(63) 賀川豊彦「身辺雑記」(1923年5月)、同上書所収、22頁。

霊運動私案」を発表し、超教派でもって伝道の一大運動を展開すべきことを主張した。しかしながら教会のなかでは賀川の主張を支持する人は少なく、具体的な動きのないままに終わった。

賀川による提案は、1928（昭和3）年6月の基督教連盟の協議会で再度取り上げられ、ようやく1年間の全国伝道の実施が決まった。首唱者である賀川はもちろんこの先頭に立って全国を伝道して回った。これが成功裏に進んだことから29年4月には基督教連盟の特別協議会で、賀川のさらなる提案である「神の国運動」の実施が決まり、30年から3年間にわたる一大伝道運動が展開することとなったのである。イエスの友会の「百万人の霊を神に捧ぐ」決議は、こうして、日本では初めての超教派による宣教運動へと発展した。この運動を評して隅谷三喜男は「神の国運動は、明治以来のキリスト教会の歴史のなかで、もっとも成功した伝道活動の一つであった」と述べている⁽⁶⁴⁾。

賀川は、1935年12月から1年をかけて、アメリカからヨーロッパ各地を廻る世界伝道に出かけた。つまり「神の国運動」を国際的に展開したのである。36年1月27日にニューヨークのホテルで行われた晩餐会の席での賀川の説教が記録に残っている。それは「神の国運動のために祈れ」と題されたもの（原題はThe Churchman）で、英語による説教であるだけに賀川の「神の国運動」へ寄せる思いがなお一層率直に語られている。そのなかで賀川はこう述べている。

「今日、キリストの教会は、ロシア、ドイツ、イタリアのみならず、国際主義に対する国家主義がめざましく成長しているきざしのある国では、どこでも一つの危機に直面しております。日本においては私たちはあまりにも多くのナショナリズムの中におかれております。それは小さな毛虫のように、狭い海峡の間に住んでおりますので、私

たちの根性まで狭くなってしまうのであります。そしてこの国においてもあるクリスチャンは偏狭であり、殻の中に住んでおります。私たちは世界中に神の国運動を必要とするのであります。私たちはなにかしなければなりません。……私たちは自分の欠点を告白しなければなりません。そのためには教会全体いや世界中に祈りの交わりを必要とするのであります。私たちが自分の欠点を告白し、世界中がこのような方法によって神の国運動を始めなければキリスト教は紀元410年に、あの永遠とも思われた偉大な都が粉碎された時のローマと同じような危機に直面すると思います。」⁽⁶⁵⁾

賀川は、「神の国運動」のためには3つの目標が必要であるとして、次の3項目を挙げている。

- (1) 伝道：霊的生活を深めるために。
- (2) 教育：より一層の平信徒指導者のための教育を含むキリスト教教育。
- (3) 組織または職域伝道：キリスト教経済倫理の応用。

第1の「伝道」では、賀川は、「我々クリスチャンは、キリストのために世界を改宗させる勇氣と冒険に満ちた迫力を必要とする」と述べている。これが宣教運動としての「神の国運動」の第一目標であることは当然である。第2の「教育」と第3の「組織または職域伝道」について、賀川のいうことを見てみたい。「教育」について賀川はこう述べている。

「私たちが教えていることはあまりにも個人的倫理に限定されております。……私たちは子供たちや青年たちにキリスト教経済倫理を教えなければなりません。そうすれば彼らはもう一度キリストに対する火を燃やすことができるのであります。もし共産主義者たちがある種の経済倫理を教えているとするならば、どうして私たちクリスチ

(64) 隅谷三喜男『賀川豊彦』178頁。

(65) 賀川豊彦「神の国運動のために祈れ」（1936年）『賀川豊彦－日本の説教Ⅱ 2－』（日本キリスト教団出版

局、2006年）所収、159～160頁。賀川の滞米中の36年2月に、日本では二・二六事件が起きた。

ヤンがキリスト教経済倫理を教えられないはずがありません。私は皆さんにお願いいたします。私たちは正しいキリスト教経済倫理を必要としているのであります。さもなくば世俗的な力は私たちを打ち負かすでしょう。これこそ世界のキリスト教に対する偉大なアッピールであります。」⁽⁶⁶⁾

そして、「組織または職域伝道」ではこう述べている。

「私たちは本物のキリスト教活動を必要としております。……説教だけではどうしても貧しい人々を満足させることはできないのであります。私たちが本当のキリストの精神を行動に表わすことができないのでしょうか。私たちは感情によってではなく、社会的、経済的行動を組織することによってもたらされる愛のリヴァイバルのために祈らねばなりません。それは私たちの福音の宣教の目標でもあらねばなりません。……今私たちに必要なのは私たちの祖先の実行した愛の行為を復活させることであります。これは現在の世界情勢において教派間にまた国家間に私たちが新しい連携と協力をもつ新しい方法を、私たちが発明せねばならないということを意味するのであります。私たちは全世界の六十五の文明国のすべての間に経済協力を必要としております。私たちはクリスチャンとして私たちのキリスト教組織を通して、この世界に真の平和をもたらすところの国際的通商関係を

を樹立させることができないのでしょうか。」⁽⁶⁷⁾

ニューヨークにおける「神の国運動」の説教において、賀川は、私たちは「正しいキリスト教経済倫理」を必要としていること、そして「この世界に真の平和をもたらす」国際的な経済協力を必要としていることを訴えている。これが、賀川にとっての「神の国運動」なのであった⁽⁶⁸⁾。そして賀川は、「私たち」という言葉について、こう付け加えていっている。「『私たち』という代名詞は全人類の広さをもっております。……私たちの住んでいる小さな共同体のためにだけ『我らの日用の糧を与えたまえ』と祈るわけにはゆきません」⁽⁶⁹⁾と。

4 協同組合の構想へ

1 キリスト教兄弟愛

1937年7月日中戦争勃発、38年4月国家総動員法公布、39年7月アメリカ日米通商条約廃棄を通告、40年7月日本労働総同盟解散、同年11月大日本産業報国会創立。賀川豊彦がアメリカとヨーロッパ各地を廻って「神の国運動」を説き帰国した後の日本の情勢は、戦時体制一色に塗りつぶされていった。そうしたなかで賀川は、相互扶助の精神を具体化する事業としてそれまで自ら先頭に立って取り組んできた協同組合について体系的に論じた著作をものした。それが『産業組合の本質とその進路』(1940年)である⁽⁷⁰⁾。

(66) 同上書、162～163頁。

(67) 同上書、163頁。

(68) 賀川豊彦は「キリスト教経済倫理」教育とその応用の重要性を訴えた。キリスト教倫理による経済＝企業活動の基礎づけを積極的に論じたものとして、M. L. スタックハウス／深井智朗監訳『公共神学と経済』（聖学院大学出版会、2004年）がある。同書では公共性という領域で神学と社会科学とが交錯することが論じられていて、興味深い。著者のスタックハウスは現在、賀川のかつての留学先であるプリンストン神学専門大学院の教授（社会倫理）をつとめている。

(69) 賀川豊彦「神の国運動のために祈れ」『賀川豊彦－日本の説教Ⅱ 2－』所収、166頁。

(70) 賀川豊彦『産業組合の本質とその進路』（1940年）『賀川豊彦全集』第11巻所収。産業組合といういい方は、1900（明治33）年に制定された産業組合法に由来する。産業組合は第二次世界大戦後の農業協同組合や漁業協同組合等の生産協同組合の前身であるが、同法には「市街地購買組合」すなわち消費協同組合に含める規定も含まれていた。今日の生活協同組合の前身は当初は「購買組合」、後には「消費組合」といわれることが多かった。賀川の『産業組合の本質とその進路』で扱われる「産業組合」は、生産協同組合、消費協同組合、信用組合、共済組合などあらゆる協同組合を含んでいる。

賀川の協同組合との直接的なかかわりは1920（大正9）年に遡る。同年8月に大阪市に有限責任購買組合共益社を、10月には有限責任神戸購買組合を設立し、その理事に就いた。23年9月の関東大震災の救援を機に、賀川は神戸から東京へ移り住み、26年に安部磯雄と協力して東京学生消費組合を、27（昭和2）年に江東消費組合を、28年に中ノ郷質庫信用組合を設立した。そして31年には新渡戸稲造（1862-1933）と協力して東京医療利用組合を設立した⁽⁷¹⁾。賀川は、とりわけイギリスのロッチデール公正先駆者組合（1844年設立）とドイツのライファイゼン（Friedrich Wilhelm Raiffeisen, 1818-1888）による農村信用組合（1862年設立）に優れた意義を学び、大正期から昭和前期における生活協同組合や信用組合の設立運動に大きな役割を果たした。

1936年1月のニューヨークでの説教のなかで、賀川は協同組合のことにひと言だけ触れている。それは、ニュージーランドのクライストチャーチとダニーデンの2つの都市で教会員の活動として協同組合が設立されたという報告である。

「私が訪問した時までは彼らはキリスト教会の活動として協同組合経済組織をもっていなかったのです。彼らにとってこれは新しいアイデアであったのですが、私がこれを提案しました時に彼らはそれをすぐに始めたのです。そして私が

そうしているように、これを神の国運動と呼んでいるのです。」⁽⁷²⁾

賀川においては「神の国運動」と協同組合の運動とが重なり合っているのである。賀川は「基督教の歴史に於て特筆大書す可きことは兄弟愛の発展である」⁽⁷³⁾という。そして、近代に入りプロテスタント自由主義と相俟って自由主義的経済社会が発展したが、そうした自由主義のプロテスタントの社会においては「兄弟愛の組織は殆んど総て教会外に組織せられたことは注目に値する」と指摘し、その理由を「教義、教条をやかましく言つて、分裂に分裂を重ねたプロテスタント教会の信条では兄弟愛的結社が出来にくいと考へたのか、キリストの金則を基礎として多くのフラタニティーが生れる様になった」と説明している。信仰の自由が保障された社会においては、フラタニティー（fraternity、友愛）の組織こそが兄弟愛の具体的姿だと、賀川は見たのである。すなわち、

「ロッチデールの一つの成功は、信仰が多少異なつて居ても愛だけは実行して行かうといふ大切な約束を持つてゐることである。若し、キリスト教各派の人々が、信仰が異つてゐても新訳聖書だけは共通的に持つてゐる如く、兄弟愛を基調としたる協同組合に於いて一致し得るならば、失業と恐慌と搾取制度だけは防止し得るのである。」⁽⁷⁴⁾

(71) 日本生活協同組合連合会50周年記念歴史編纂室編・斎藤嘉瑋著『現代日本生協運動小史』（コープ出版、2003年）22～33頁。市民型（＝地域）生協としては1919（大正8）年に吉野作造の指導により東京に家庭購買組合が設立されている。同書、22頁。

なお、イギリスのロッチデール公正先駆者組合に日本人として最初に訪問したのは1872（明治5）年の野口富蔵と松井周助であり、同組合に倣って日本に最初に設立された消費組合は、1879年に早矢仕有（丸善の創業者）らにより東京に設立された共立商社である。杉本貴志・鈴木岳『国際協同組合運動略年表』日本協同組合学会訳編『21世紀の協同組合原則 ICAアイデンティティ声明と宣言』（日本経済評論社、2000年）所収、138頁を参照。明治20年頃までは「共立」と

いう呼称が学校にも使われた。吉村日出東によれば、今日の学校はその運営財源の出所により国立・公（地方自治体）立・私立に分けられるが、明治19年の諸学校令公布までは共立をもつてする学校があった。この場合の共立は「共同で出資・設立」されたという意味である。吉村日出東『「共立」考』『大学史研究』第22号（2007年）所収を参照。この論稿は学校の設置・運営のあり方を「共」の視点から再考する手がかりを与えている。共立は協同組合立であるともいえる。

(72) 賀川豊彦「神の国運動のために祈れ」『賀川豊彦－日本の説教Ⅱ』所収、168頁。

(73) 賀川豊彦「キリスト教兄弟愛と経済改造」『賀川豊彦全集』第11巻所収、192頁。

(74) 同上書、195頁。

ニューヨークでの説教では賀川はこうもいっている。

「国内において、国外において私たちが一つになるということはそうむずかしいことではないであります。今日私たちはプロテスタント諸教会の中にたくさんの殻をもつが故に苦しんでいるのであります。カトリック教会は多くの職制をその中にもつ一つの教会であります。私たちも教派を職制に変えることができないでしょうか。一つ一つの教派はその特性をもっております。例えば、メソジスト派は一つの良い要素になりましょう。ウェスレーは朝五時に起き日に三度祈り、彼は自分の余暇を貧民街の中で用いることに捧げました。私はすべてのメソジスト信徒がこれにならうかあるいはメソジストの名を捨てるかしてほしいと思います。なぜなら「メソジスト」というのは「几帳面」という意味だからであります。しかし多くのメソジストはこれらの方法をぜんぜん守っておりません。私はバプテスト、組合派、ジュネーヴにおけるジョン・カルヴィンの神政政治が好きです。しかし今日の長老派は、私もその一人ですが、火を失っております。もし私たちがカルヴィンの火を失っているとしたら、私たちの長老主義は無意味であります。私たちは時代の要求に目覚めもう一度火を戻さねばならないのであります。」⁽⁷⁵⁾

賀川のこうしたエキュメニカルな発言は、1910年代から始まったプロテスタント諸派による国際宣教協議会(IMC)―1961年に、48年創立の世界

教会協議会(WCC)に統合された一のエキュメニズム運動と呼応したものである。彼のアメリカとヨーロッパ各地への歴訪もこの運動のなかにおいてのものであった。国際宣教協議会は各地で会議(宣教大会)を重ね、神学の立場から現代社会の諸問題についての意見を公表した。その意義についてスタックハウスは次のように論じている。

「第二次世界大戦前の最大の協議会は1937年にオックスフォードで行われた。その際公にされた8巻の報告書は、おそらく西洋世界が偉大な神学的な精神によって20世紀において生み出した社会や経済の問題についてのもっとも深い洞察力をもった提言であろう。……強い言葉で、無政府状態の資本主義、ソヴィエト型の共産主義、そして「ファシズム的な国家社会主義」を批判したのであった。すなわちその批判というのは20世紀の経済学の支配的な形態は道徳的、霊的に腐敗しており、それ自体の再構築を内部から生じさせる力を持ち得ていないということであった」⁽⁷⁶⁾。

国際宣教協議会は1938年12月にインドのマドラスで大会を開催した。64か国から約500人の代表が会議に参加した。これに賀川豊彦は、日本から派遣された河井道、久布白落実、小林フミ子の女性キリスト者を含む23人のうちの1人として参加した。この会議においてキリスト教の社会的責任に関する宣言が示された。その6つの要点は、シルジェンのまとめたところによれば、次の通りである⁽⁷⁷⁾。

- (1) 我々は誰でもその人種、生まれ、肌の色、または文化と関係なく一人の人間と見なす。
- (2) 我々は人類を協力の単位としよう。

(75) 賀川豊彦「神の国運動のために祈れ」『賀川豊彦―日本の説教Ⅱ 2―』所収、161～162頁。

(76) M.L. スタックハウス『公共神学と経済』163～164頁。この会議の報告書にはJ.H. オルドハム、エミール・ブルンナー、F.W. ファーラー、C.H. ドッド、クリストファー・ドーソン、パウル・ティリッヒ、ウィリアム・テンブル、ラインホルド・ニーバー、ケネス・スコット・ラトゥーレットが寄稿している。スタックハウスは、報告書には2つの制約があるとして、(1)「第三世界」からの声がほとんど反映されていない

こと、(2)カトリック教会と十分な議論をしていないこと、を指摘している。同書、165～166頁。

(77) ロバート・シルジェン『賀川豊彦 愛と社会正義を追い求めた生涯』255頁。なお、ドイツの代表者だけがこの宣言に加わらなかった。同書、256頁。

この宣教大会に出席した後、賀川はガーンディー(Mohandas Karamchand Gandhi, 1869―1948)を訪問した。ガーンディーとの会見で、賀川は自分が日本において「異端者」になっていると述べ「あなたが私の立場にいたら、あなたはどうかを知りたい」と問

- (3) 我々は全ての人間の自己開発のための機会の平等を要求する。
- (4) 我々は、様々な国家に開かれている経済的機会の現状は最も非キリスト教的であると見なす。なぜなら、それが特定の国家に、世界の原材料や、財政的援助や、公開の地域にアクセスする特権的地位を与えており、他の国々には否定されているからである。
- (5) 戦争は人間性への侵害であり、キリスト教徒の良心にもとるものだから、我々は国際間の紛争を解決する手段としての戦争を拒否する。我々は善が悪に、愛が憎しみに、十字架が世界に打ち勝つキリスト教という武器への信仰を再確認しよう。
- (6) 我々は、引き裂かれ、混乱している罪深き世界に、神が私たちにくださるもの、「神の国」を与えよう。

こうして、国内のそして国際的な協同組合運動は、賀川にとって今や、キリスト教界の世界的なエキュメニズムの運動と重なり合って、最も望ましい社会改革の姿となって具体化してきたのである。賀川は論文「キリスト教兄弟愛と経済改造」の末尾で次のように述べている。

うた。それに対しガンディーは、自分の見解をいうのは厚かましと一度は断ったが、さらに賀川が意見を求めたため、ガンディーはこう述べた。「私なら異端の考えを表明し、銃で撃たれるでしょう。……私はあなたの協同組合とあなたのすべての仕事をてんびんの一方に乗せ、あなたの国の名誉を反対側に乗せる。もし国の名誉が売り渡されていることが分かったら、あなたは日本に反対の意見を表明し、そうすることによって、日本をあなたの死によって生かすようにしてほしい。……あなたが私の意見を求めたのだからそれを言わないわけにはいかない」。このガンディーの死をもってする市民的不服従の決然とした表明を受けて賀川の態度は曇りを見せていったことをシルジェンは指摘している。同書、258～261頁。

(78) 賀川豊彦「キリスト教兄弟愛と経済改造」『賀川豊彦全集』第11巻所収、224頁。

(79) (80) (81) 賀川豊彦『産業組合の本質とその進路』『賀川豊彦全集』第11巻所収、237頁。賀川は、1930年代の恐慌下の日本に展開した農村更正運動について触れ、真に農村更正を進めるのであれば「頑固な家族意

「若しも経済行動を今日の儘に捨てて置けば、永遠に世界平和は来ない。また宗教を今日の儘に捨てて置けば、永遠に世界平和は来ない。十字架の上に現れたる贖罪愛意識が、協同組合運動に依る兄弟愛を通して、万国の経済活動にまで応用せられるならば、その日にこそ世界平和は地上に來たといふことが出来やう。」⁽⁷⁸⁾

2 唯心的経済史観の帰結としての協同組合

『産業組合の本質とその進路』の内容を見てみよう。『主観経済の原理』において「主観経済」と呼んでいたものが、ここでは「意識経済」といい換えられているが、意味するところは同じである。

賀川は、1900年の産業組合法制定以来の産業組合について、「日本の産業組合は今日まで……倫理運動の自覚も、意識経済の根本認識も持たずして発展してきた。そのために組合員数だけは増加したけれども、組合意識に於ては誠に欠けたものがある」という。賀川はこう述べて、産業組合組織が単なる同業者の利己的集団となっている場合が多いという実情を批判した⁽⁷⁹⁾。

識の障碍」を排除しなければならないとして、次のように説いている。「村全体が更正しようと思へば、村全体の土地利用組合のために、自分の全能力を捧げるといふことをやらなければならぬ。然るに困ったことには日本では村全体といふことよりも、自分の家族自分のお祖父さんが土地を買うたんだからと、自分の家族意識だけは持つて居るけれども、村意識は持つて居らない。……俺の祖先の土地をそんな組合に渡せるもんかといふ訳である。であるから、この我国の農村更正といふことを考へても、これは喜んで村全体を護らうといふ家族意識から村意識にまで目覚めて来なければ村は更正しない」。そして、産業組合の実情は「組合利己主義」だと、次のように批判している。「皆は組合にはいれば多分少し儲かるだらうと、営利主義から組合に加入する。今の産業組合は大抵そんなものである。儲けるための組合が多くて村のために、国家のために、民族のためにと思つて居らぬ。……資本主義が一寸形態を変へた組合的資本主義といふ形になつて居る。今の一万五千あるところの日本の組合といふものは、残念ながらまだ組合的資本主義的搾取制度の変

「社会成員相互の兄弟愛的自覚の濃度に従つて産業組合自体の組織内容に大きな変化が起る。命を捨てても同志を愛せんとする者は、全財産を抛つて、協同組合を守る。この意識内容を空間的に、また時間的に拡張すれば、暴力を無用とする経済革新が断行される筈である。それで産業組合の発展は全くこの兄弟愛への自覚を促す各種の教育設備の上に、乗せられてゐると考へてもよい。この兄弟愛意識の社会的自覚がなければ、凡ゆる産業組合も何等の効用を持つものではない。」⁽⁸⁰⁾

賀川は、スイスの教育家ペスタロッチー(Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) による「隣人愛の教育運動」が協同組合を誕生させたこと、また日本の二宮尊徳(1787-1856)が「心田を耕さずして水田を耕し得ず」と説いて協同組合の礎を築いたことを挙げて、「協同組合の根本理論も、全く二宮尊徳先生やペスタロッチの経済心理的原理を現代的に再考したもの」だという。すなわち、「意識の眼覚めが、全民族に及び、全人類の自覚となつた時、経済は始めて全意識的になる」。「社会成員の一つ一つが、この全体意識に眼覚めて、搾取を離れた互助友愛の経済組織を結成せんとする運動が、協同組合の組織である。従つて社会成員の意識的眼覚めなくして、完全なる協同組合の運用は不可能である。ここに於いてかの産業組合運動には心理的要素と倫理的要素と教育的要素の三方面を基礎にしたる社会経済が発展する」⁽⁸¹⁾と述べている。

賀川は、「全体意識」に目覚めていない産業組合を批判し、産業組合に「心理的要素」と「倫理的

要素」と「教育的要素」を吹き込んで、「完全なる協同組合」へと発展させよう、というのである。

賀川は、既に見た通り、1920年の著書『主観経済の原理』のなかでマルクスの唯物史観を批判し「唯心的経済史観」を説いた。この唯心的経済史観は1940年の著書においても全く変わっておらず、この考えの具体像として彼の協同組合論があるといえる。「協同組合運動は、精神的意識をもたないものには出来ない。マルクスの階級意識は、協同組合には用をなさない。全階級的の協同意識、即ち、所謂聖雄ガンジーの靈魂力を重んじられない人は、協同組合運動は出来ない」⁽⁸²⁾と賀川はいう。前年にインドでの世界宣教大会出席のうちに会談したガンディーの名がここに記されている⁽⁸³⁾。「全階級的」は兄弟愛的といい換え得るだろう。そして続けてこういう。

「産業組合の人達は自分だけ儲ければよいといふやうな、そんな貪欲で産業組合を作るならば、そんなものは発展しない。精神修養は精神修養で金儲けは金儲けだといふ考へで協同組合を作るならば、これは協同組合ではない。協同組合は儲けんが為めに作るのではない。即ち、日本の窮状を救ふ為め、都市、農村の連絡を公正なる価格によつて、うまく、資本を集積せず、全日本を改良する、その為めに、此の運動をするのであるから、精神主義の組織的経済的な見地、即ち我が理想とする協同組合であるといふことを意識する必要がある。」⁽⁸⁴⁾

こう述べて賀川は、これが「私が唯物史観に対

形である。残念な話ではあるが之は事実である」。同書、366-367頁。なお、産業組合を思想的に深く捉えた人として柳田国男(1875-1962)がいる。昭和恐慌下における柳田国男の産業組合論について、藤井隆至「柳田国男—協同組合の思想家—」大森郁夫編『日本の経済思想1 経済思想第9巻』(日本経済評論社、2006年)所収を参照。

(82) 賀川豊彦『産業組合の本質とその進路』賀川豊彦全集第11巻所収、266頁。

(83) 石井一也「マハートマ・ガンディーの経済思想」八

木紀一郎編『非西欧圏の経済学—土着・伝統的経済思想とその変容— 経済思想第11巻』(日本経済評論社、2007年)所収は、ガンディーが抱いた「協同組合的社会」の構想を論じている。

(84) 賀川豊彦『産業組合の本質とその進路』賀川豊彦全集第11巻所収、266頁。引用文中の「日本」を世界に、「都市」を豊かな国に、「農村」を貧しい国にそれぞれ置き換えてみるならば、その一文は今日の地球規模の経済的課題にそのまま当てはまる。

し、唯心的経済史観の立場から、その結論として協同組合を主張する理由である」というのである。

そして、『新約聖書』から導いた「経済価値の七原則（要素）」すなわち「イエスの厚生経済の原則」に基づいて、次のように協同組合を7つに分類して示している⁽⁸⁵⁾。

- (1) 生命価値の原則に基づく保険組合（医療保険・生命保険）。
- (2) 労力価値の原則に基づく生産組合（土地生産組合・工場生産組合）。
- (3) 交換価値の原則に基づく販賣組合。
- (4) 成長価値の原則に基づく信用組合。
- (5) 選択価値の原則に基づく共済組合（教育共済・失業共済）。
- (6) 法的価値の原則に基づく利用組合（電力・ガス・水道・交通等の事業）。
- (7) 目的価値の原則に基づく消費組合。

これら7つの協同組合が相互補完的に経済生活の全体を覆うことによって協同組合の効果は発揮される、と賀川は考えた。すなわち、「地方的に組織せられた組合員のみの利益の外考へない特殊協同組合に対して非常な反対がある。或者はこれ等を資本主義の変形したものとして罵倒する者もある。確かに全体意識に目覚めないで、或る一地方のみの利益を考へて、局部的に組織する場合は著しい弊害がある。然し、私が主張する如く、経済生活の全面に互つて七種協同組合を組織して掛るならば、決してさうした弊害は無いのである」⁽⁸⁶⁾と。そして、「最も根本的でしかも最も組織するのに困難なのは消費組合である」と賀川はいう。なぜならば「それは要するに、消費経済に対する一般人の意識がまだ目覚めてゐないからである。労働問題に対しては一般民衆はその必要を感じて、意識的に目覚めてゐる。それに反して消費経済の方面は殆んど無自覚な行動を反復してゐるに過ぎない」⁽⁸⁷⁾。このことについて賀川は、既に論

文「家庭と消費組合」（1927年）において、次のように述べている。

「何よりも、大切なものは生命である。その生命を最も聖く、最も高く引き上げて行く工夫が家庭の生活といふものである。」⁽⁸⁸⁾

「家庭の主婦達が大いに眼覚めて、台所経済を根本的に改良する工夫をたてるならば、それこそ社会は一大改造を見ると、考へて差支へがない。」⁽⁸⁹⁾

賀川は、都会における日用品小売店の数があまりにも多いことを数字を挙げて指摘し、「どうしてこんなに小売店が多くなつたかと云ふならば、それは家政を執つてゐる主婦達が、余り〔買い方を〕自覚しない為に斯うなつたのだ」という。賀川は、注文（ご用）聞きや掛売りによる小売りの弊害を指摘すると共に、購買者の側の一方での虚栄心と、そして他方での「投売り」好きを指摘している。

「或る無智な主婦などは、何処かの投売相場を見て来て、消費組合の品物は高いと云ふのである。成程何処の品物でも損をして投売してゐる品物に比べるなら安い物はない。然し、よく考へてみれば、投売する様なことのある世界は一体幸福であらうか。損をして売することは大きな浪費であつて、社会全体から云ふならば、さうした事のある所はきつと何処かに穴があいてゐて、大きな損害を社会全体に与へてゐることを考へない主婦達は、いつまで経つても、安定した組織のある社会にすることは出来ない。いつも投売の商品を買はうと思ふから競争が激しくなり、競争が激しくなるから無茶苦茶な社会が生れるので、無茶苦茶な競争が無いやうに、従つて無駄遣ひのない社会を作つて行けば、社会は安定し、従つて生活不安と

(85) 同上書、298～308頁。

(86) 同上書、297頁。

(87) 同上書、307～308頁。

(88) 賀川豊彦「家庭と消費組合」（1927年）『賀川豊彦全集』第11巻所収、49頁。

(89) 同上書、50頁。

いふものは無くなつてしまふ筈である。」⁽⁹⁰⁾

協同組合が競争原理に基づかない経済社会を実現することを賀川は分かりやすく説いている。賀川は、この論文のなかで消費組合の仕組みとその設立の仕方を懇切に述べ、東京砲兵工廠の職工によって組織された共働社消費組合等の例も挙げている。そして最後に「之迄の消費組合が多く発達しなかつた理由は、婦人が消費組合運動に参加しなかつたことにある。即ち台所の隅つこから始められなければならぬ」と述べ、消費組合運動へ女性性が参加するべきであることを説いている⁽⁹¹⁾。

3 社会科学と神学と一むすびに代えて

賀川豊彦が『産業組合の本質とその進路』を公刊したのが1940年4月のことである。それは、アジア・太平洋戦争へと突き進む日本の戦時統制が一層強化されるなかで、日本無産者消費組合連盟が38年に、東京学生消費組合が40年にいずれも治安当局の弾圧により解散させられたのと時期を同じくしていた。賀川の著作は言論活動の著しい制約のなかでのものであった。その限界は同年8月25日に到来した。

この日賀川は自身が牧師をつとめる東京世田谷の松沢教会で「エレミア哀歌に学ぶ」と題する説教を行った。旧約聖書にあるエレミア哀歌はユダ

ヤ国家エルサレムの滅亡を悲しんだ詩文であり、亡国は民族の罪の結果であることが述べられている。しかし神は決して民を見捨てない。

「口を塵につけよ、あるひは望みあらん、おのれを撃つ者に頬を向け、充(みち)足れるまでに恥辱(はずかしめ)をうけよ、そは主は永久(とこしなえ)に棄(すつ)ることを為し給はざるべければなり。」(エレミア哀歌3章29-31節)

この文句を引いて賀川は「これはエレミア哀歌の中で私の一番好きな句である」と述べている。そして、「世界の理想は神中心の、神の国の組織である。そこにはいささかも悪の支配がなく、ただ愛と謙遜と知識と芸術とが支配するのみ、すなわち正しき者が勝利を得る世界である。この究極の真理を忘れてはならない、これを忘れる者が負け、これを忘れない者が勝つのである。……世界を救う真理のためには徹底的の辱(はずかし)めを受けることも時によっては忍ばなければならない」⁽⁹²⁾と。これが、賀川が日本においてキリスト者として語ることの出来た限界であった。この説教による礼拝が終了した直後、賀川は反戦運動嫌疑で渋谷憲兵隊に拘引され、9月13日まで収容され取り調べを受けた⁽⁹³⁾。そして賀川の個人雑誌『雲の柱』は説教「エレミア哀歌に学ぶ」を掲載

(90) 同上書、53～54頁。

(91) 同上書、67頁。賀川はイギリスの消費組合運動における「女性ギルド」の活躍や神戸消費組合(有限責任神戸購買組合が1923年に有限責任購買組合神戸消費組合と改称した)の事例を紹介し、女性の家庭内および社会全般における発言力の向上を求めた。神戸消費組合では1924(大正13)年に「家庭会」(代表小泉ハツセ)がつくられ物価調査や家事講習等に取り組んだ。27(昭和2)年には東京の西郊共働社に「家庭会」(会長与謝野晶子)がつくられた。日本生活協同組合連合会50周年記念歴史編纂室編・斎藤嘉璋著『現代日本生活協同運動小史』28頁。ところで、日本の1970年代からの地域生活協同運動は、女性組合員を主体にして居住地域での小グループ(=班)単位による「共同購入」に力をいれたことから、組合員すなわち運営は男性、利用は女性というそれまでの構造から脱した。これは生活運

動における女性の発言力を大いに向上させることに貢献したが、同時に運動の担い手が昼間に在宅している専業主婦層に傾くことともなった。この問題について、上野千鶴子「生協のジェンダー分析」現代生協論編集委員会編『現代生協論の探究(理論編)』(コープ出版、2006年)所収を参照。

(92) 賀川豊彦「エレミア哀歌に学ぶ」『賀川豊彦—日本の説教Ⅱ—』所収、213～222頁。

(93) 雨宮栄一は、「エレミア哀歌に学ぶ」の説教の内容自体が反戦運動嫌疑を受けたのではないとし、嫌疑の理由として、それ以前から賀川はアメリカのキリスト者と交友関係が深く、南京にいたマギー牧師が日本軍の犯した残虐行為を写したフィルムが日本に持ち込まれた際にそれを賀川が見て、英文で「中国の同胞のために」と題して「日本の罪を許してください。日本のキリスト信徒は、軍部を抑制する力はないけれども、

した同年9月号をもって終刊となった⁽⁹⁴⁾。

賀川豊彦は江東消費組合の組合長をつとめていた。しかしながら、砂糖・マッチ・食用油等の主要生活物資が配給制となり、米穀は食糧営団による一元的管理となって、もはや消費組合の活動は不可能であった。都市部への空襲による打撃も加わり、ほとんどの組合が解散に追い込まれた。そして、かううじて1945年8月の敗戦後まで生き残ったのは、東京の江東消費組合、家庭購買組合、神戸の灘購買組合、神戸消費組合等であった⁽⁹⁵⁾。

1945年10月、協同組合運動再建懇談会が開催され賀川豊彦が議長に就任、数回の会合が重ねられた後、同年11月18日に日本協同組合同盟が設立され、会長には賀川が就いた。そして賀川は47年11月に著書『新協同組合要論』を日本協同組合同盟から公刊した。「日本を再建する唯一の道が協同組合運動にある」と賀川はいう。

「協同組合は国民の互助愛を、意識経済に移そ

うとするもので、愛が根本である。資本主義が搾取を根本とするに對し、あくまで助け合いの愛を根本とする。この点について協同組合は資本主義に対する矯正である。」⁽⁹⁶⁾

賀川の協同組合が帰ってきた。賀川の協同組合論は以前と全く変わっていない。賀川は都市と農村との共同互助を説いて、こう述べる。「今の日本の様に大きい都市をつくる事はまちがいである。都市があまり大きくなると、農村から遊離し、反目する様になる。小さくまとまて、都市の内部で、又都市と農村との間に共同互助の出来る社会をつくりたいものである。そういった道義の日本を作りたい。之が新しい国家の道である」⁽⁹⁷⁾と。

都市と農村との間で「共同互助の出来る社会」を協同組合組織によって作ろうというのが賀川の構想である。それは、保険・生産・販売・信用・共済・利用・消費の7組合によって完成される。協同組合は「単なる経済理想論でなくして、實際

心あるものは日本の罪を嘆いています。私どもの祈りと働きによって、キリストの名による両国の親和の日が来るように」という文章を公表した(1940年版「カガワ・カレンダー」紙上)ことを挙げている。雨宮栄一『暗い谷間の賀川豊彦』170頁。

- (94) その後の戦時下における賀川については本稿では立ち入らない。賀川は1941年4月から8月までキリスト教平和使節団の一員として訪米し、翌42年8月に満州(中国東北部)を伝道旅行した。43年には5月に「反戦思想・社会主義思想」を理由に神戸相生警察署に留置され、11月にも「反戦論的行為」により東京憲兵隊による取り調べを受けた。44年10月から中国に宗教使節として渡航、翌年2月に帰国した。総じていえば、賀川は、41年12月のアジア・太平洋戦争勃発以後、国内でのキリスト教活動が全く困難ななかで、中国に出かけて日本軍部の計らいのもとに現地宗教関係者と接触していたことになる。雨宮栄一『暗い谷間の賀川豊彦』の「Ⅱ 太平洋戦争勃発(昭和16年)前後まで」「Ⅲ 太平洋戦争中」、ロバート・シルジェン『賀川豊彦 愛と社会正義を追い求めた生涯』の「第9章 太平洋戦争に向かって」「第10章 戦時下の平和主義者」を参照。

満州基督教開拓村のことだけに触れておかなければならない。賀川は1940年に、「全基督教徒に訴ふ満州基督教開拓村に勇敢に参加せよ」と題する一文を

『神の国新聞』同年7月10日号紙上に公表した。「我らは五族協和の精神をもつて宇宙の創造者を天父と信じ、世界各国の諸民族を神の子と信ずる。我らは五族協和の根本概念を持つていといつてよい。……十字架の旗印を奥地に進めて、満州の奥地にキリストの名による新しき村を建設したいと思う。十字架の血にもゆる日本の農村青年よ、集まれ、そして新しい日本建設に参加せよ」と。賀川は3度にわたり満州を視察旅行している。果たして賀川は「満州」に何を見たのか。満州建国の際ローマ法王庁はそれを承認した。それはこの地にカトリック信者の村があり、彼らを保護するためであった。日本国内ではマイノリティ・グループであり、その信仰に弾圧が加えられているキリスト者たちによって新しい村(共同体)をつくるということは賀川にとってある種の夢であったのかもしれない。キリスト教伝道医師の満州での活動を描いたデュガルド・クリスティー／矢内原忠雄訳『奉天三十年』(上)(下)(岩波書店、1938年)も刊行されていた。賀川が夢を抱いたのだとすれば、それは虚構の上に描かれた幻想であったのである。

- (95) 日本生活協同組合連合会50周年記念歴史編纂室編・斎藤嘉璋著『現代日本生活協同組合小史』32～33、42頁。
(96) 賀川豊彦『新協同組合要論』(1947年)『賀川豊彦全集』第11巻所収、482頁。
(97) 同上書、487頁。

運動であるから、これを実践するには、道義を加えねばよく運営出来るものではない」。そして、その「道義」には「宗教的精神の裏づけ即ち確信と愛が必要である。そこまで協同組合精神をもつてゆかねば、理想は如何に高遠で立派でも、それを成長させ達成し完成させることは出来ない」のである⁽⁹⁸⁾。

こうして59歳になった賀川豊彦を評して、隅谷三喜男は「かれは若い日からの長い社会運動の歩みの果てに、協同組合主義に安住の場を見いだしたのである」⁽⁹⁹⁾と述べている。そして、1943年以来構想をねり執筆を続けてきた『宇宙の目的』を公刊したのが1958年6月、賀川70歳の時であった。

賀川豊彦の第二次世界大戦後における主な著作は『新協同組合要論』と『宇宙の目的』である。賀川自身にとって、協同組合の目的＝運動と宇宙の目的＝運動とは「愛」によって貫かれ、思想的に一体のものとなっているのである。そこには、

社会科学と神学とのまことにユニークな総合を見ることができる⁽¹⁰⁰⁾。

(98) 同上書、498頁。

(99) 隅谷三喜男『賀川豊彦』161頁。

(100) 神学の教えは、信仰を持たない者にも意味を持つに違いない。経済学者のアマルティア・センは、その著書*Development as Freedom*, 1999 (石塚雅彦訳『自由と経済開発』(日本経済新聞社、2000年))の最終章で、次のように述べている。長文になるが引用したい。「たしかに、私たちが生きるこの恐るべき世界は一少なくとも表面上は一あまねく全能の慈悲心の支配が及んでいる世界のようには見えない。(神の)情け深い世界秩序が、どのようにして過酷な悲惨、執拗な餓え、欠乏と絶望の暮らしに苦しむこれほど多くの人を含み得るのか。なぜ毎年何百万人もの子供が食料、医療、社会的保護の欠如のために死ななければならないのか。これらを理解することは困難である。

もちろんこれは新しい問題ではない。神学者たちはこのテーマを論議してきた。神は人間が問題に自分で対処することを望んでいるのだ、という主張は知的にもかなり支持されてきた。私は宗教を持たない人間として、この論争の神学的価値を評価する立場にない。しかし、人間には生きる世界を自分たちで発展させ、変える責任があるのだという主張の持つ力を認めることはできる。人がこの基本的な関係を受け入れるのに信心の有無を問われる必要はない。一緒に一広い意味

で一生きている人間として、身の回りに目にする恐ろしい出来事は、本質的にわれわれ皆の問題であるという思いから逃れることはできない。それらはだれかほかの人の責任でもあるかどうかはともかく、われわれの責任なのである」。アマルティア・セン『自由と経済開発』325～326頁。

また、ムハマド・ユヌス／小杉尅次訳「グラミン生協とグローバル社会に生きる村の女性たち—ノーベル平和賞受賞に際して—」(上)(下)『福音と世界』2007年11月号・12月号所収を参照。これは、ムハマド・ユヌスが2006年12月10日にオスロで行ったノーベル平和賞受賞記念講演の日本語訳である。ユヌスが設立・発展させたグラミン・バンク(村の銀行)を小杉は「グラミン生協」と訳していることが注目される。訳者はユヌスが果たした仕事の内容から見て、この組織に銀行という名を付けることは不適切であると判断したのである。ユヌスがグラミン・バンクの実践において目指すところは、アマルティア・センの理論におけるケイパビリティ(潜在能力)概念を用いた「自由としての開発」と重なるところが大きい。またそれらは賀川豊彦の協同組合の構想とも多く重なるのである。拙稿「The Capability Approach—人間への励ましとしての経済の原理を求めて—」『地域創成研究年報』第2号(愛媛大学、2007年)所収を参照。